

多重人格なツチノコ

☆ショウ★

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここはジャパリパーク。

ヒトの姿をした動物達と触れ合える巨大総合動物園・・・は過去の話。

今は来客が途絶えて久しくなった動物園だ。

そんなジャパリパークに住むフレンズの一人であるツチノコが、酒を飲むため図書館へ訪れた。

そんなツチノコが酒を呑んだ途端様子がおかしくなり、今まで全く見たこともないクールで強くてカッコイイフレンズとなっていた。

けものフレンズの二次創作です。この話にはアニメ版けものフレンズのネタバレもありますので、ご注意ください。

また、ツチノコの多重人格者という設定はこの小説だけのオリジナル設定です。間に受けないようにしてくださいね。

目次

第一話	ツチノコと酒	1
第二話	ツチノコと記憶	5
第三話	ツチノコと仲間	10
第四話	ツチノコとさばんな	17
第五話	ツチノコとじゃんぐる 前編	22
第六話	ツチノコとじゃんぐる 中編	33
第七話	ツチノコとじゃんぐる 後編	44
第八話	ツチノコとこうざん	52
第九話	ツチノコとカフェ	57
第十話	ツチノコとさばく	64
第十一話	ツチノコとさばく 中編	69
第十二話	ツチノコとさばく 後編	77
第十三話	ツチノコとこはん	81
第十四話	ツチノコとこはん 後編	86
第十五話	ツチノコとへいげん	92
第十六話	ツチノコとへんげん 中編	96
第十七話	ツチノコとへいげん 中編その2	101

## 第一話 ツチノコと酒

ここはジャパリパーク。この世界の何処かにある、巨大総合動物園だ。ここにはサンドスターによってヒトの姿になった動物達、『フレンズ』が住んでいる。

そんなフレンズ達だが、動物だけでなく世間一般で知られていない生き物、所謂UMAだとか妖怪だとか言われる者達もフレンズとして生きている。

そんな未確認生物の一匹であるツチノコもフレンズとしてジャパリパークに住んでいた。

「おい博士。助手。頼みがある」

水色の髪にヘビ柄のフード、そしてワンピース風のパーカーに一本下駄という出で立ちの少女、ツチノコがジャパリパークにある図書館へと足を踏み入れた。

「む、ツチノコですか。珍しいですね」

「お前が我々を頼るとは何かあったのですか？」

そんなツチノコに応じるのはアフリカオオコノハズクのフレンズである博士、通称コノハ博士とワシミミズクのフレンズである博士の助手、通称ミミちゃん助手だ。

「ああ、遺跡を一通り探索して見つからなかったからな。ここが最後の希望だ」

ツチノコは少し恥ずかしげに言う。コノハ博士やミミちゃん助手にも勝るとも劣らない知能を持つツチノコには他人を頼るのはあまり好ましくない事のようなのだ。

「いいから早く要件を言うのです」

「我々はまだかばんの手伝いをしないといけないのですよ」

「なにっ、かばんが来てるのか!？」

「かばん」というのは、ジャパリパークへ突然現れた謎が多い少女だ。最近の騒ぎでその正体はヒトという動物のフレンズだと言う事が分かった。

その後は、他のヒトに会うため海へ出たがなんだかんだ言って結局

また戻ってきてこの島に住んでいる。

「ええ、かばんはヒトとしてもっともつと沢山の知識を付けたいと読書中なのです」

「我々はそんなかばんの為に補佐をしているのですよ。ま、何故かサーバルも着いてきているのですが」

「当たり前だよ！私とかばんちゃんやさんは素敵なコンビなんだから！」

「サーバルちゃん、ちよつと恥ずかしいよ」

遠くから二人の声が聞こえた。一つは先程から話に出てたヒトのフレンズであるかばん。もう一つはさばんなちほーからずっとかばんを支えてきたサーバルキャットのフレンズであるサーバル。

「あ、ツチノコさんお久しぶりですね」

「ああ、かばん。お前も元氣そうだな」

お互いに挨拶するツチノコとかばん。そして

「ツチノコが自らここに来るなんて珍しいね！」

「わああああ!!」

ツチノコにいきなり飛びつくサーバル。そして奇声を上げながら図書館の陰に隠れるツチノコ。よくある光景だ。

「なんだコノヤロー！キツシャー！」

ツチノコが遠くから威嚇するまでセットで。

「ツチノコ！さっさと要件を言うのです！」

さっつきより微妙に怒りがこもった感じでコノハ博士が言う。

「ああ、オレの要件はな・・・酒を恵んでほしい」

ツチノコがそう告げる。

「やはり酒でしたか。お前は相も変わらず酒好きですね」

「ああ。最近呑んで無いからな。久しぶり呑みたくなつた」

「ねえツチノコ、さけって何？」

サーバルが純新無垢な瞳でツチノコに問いかける。

「あ、僕も知りたいです。教えてくれませんか？」

かばんもサーバルに続く。そんな二人を見て「仕方ないな」言わんばかりにツチノコが興奮気味に説明する。

「酒ってというのはダナ、普通の水のように見えて味とかは全然違う最

高に美味しい飲み物だぞ！オレの好物でな、喉越しが最高で味もよくつてすんごく美味しいんだ！」

「へえー！すごい！私も飲みたいー！」

「止めといた方がいいのです」

サーバルの興味津々な声に待ったをかけたのはミミちゃん助手。

「ええーなんでえ?!」

サーバルが心底残念そうに口を曲げる。

「酒にはアルコールというものが入っていて、飲むと一種のトリップ状態のような感覚に陥るのです」

「酔っ払ってるとも言うのです」

コノハ博士が説明し、ミミちゃん助手が付け加える。

「酔っ払うとどうなるんですか？」

かばんが読んでた本を閉じ、本格的に話に入り込んでくる。

「そうですねえ、個人差がありますが、酔うと足元が覚束なくなったり、急に泣いたり怒ったり笑ったり情緒不安定になったりします」

「例えばアライグマが酒を呑んだ時は「洗い上戸」になったらしいですよ。片っ端から何でも洗いたくなくなったみたいですよ」

「まあ、オレは酔ったことなんて無いがな」

博士助手コンビの説明を、ツチノコの自慢で終わらせる。

「なるほど、面白いですね。僕やサーバルちゃんが呑んだらどうなるのかな…」

「興味本位で呑むのはオススメしないのです」

「酒は人体に悪い影響を及ぼす可能性があるので止めておいた方がいいですよ」

「うーん、そうですか…」

かばんが残念そうに呟く。

「それより博士、酒あるのか？」

ツチノコがワクワクしながら博士に聞く。

「はい、酒瓶が一本だけ見つかったのです」

「中身はしっかり入ってますよ」

コノハ博士の言葉に合わせてミミちゃん助手が図書館から酒瓶を

持ってくる。

「おおっ！久しぶりの酒だああ！」

ツチノコはひどく興奮しながら酒瓶を受け取った。

「お返しはジャパリまん二週間分です」

「ああ、了解した。今度持ってくるよ」

ツチノコが軽く博士と会話すると、早速が酒瓶を開け、酒を飲み始めた。そして、

ドサツ

その場で倒れた。

「ツチノコ!?ど、どうしたの!?!」

「ツチノコさんっ!?!」

サーバルとかばんが慌ててツチノコに駆け寄って声をかける。すると、

「う、うう…」

ツチノコが静かに唸る。

「ツチノコ！大丈夫!?!」

更にサーバルが声をかけると、

「ああ、うぐっ」

苦しそうにしながらツチノコが起き上がった。

「良かった〜」

サーバルが胸に手を当て一息つく。

「どうしました?何があったんですか?」

かばんが心配そうにツチノコの顔を覗き込む。暫くボケつとしていたツチノコだったが、かばんが被っている赤と青の羽根がついた帽子を見て目を見開いた。

「お、お前、パークガイドのミライかっ!?!」

## 第二話 ツチノコと記憶

サーバル「え？ミライさん？」

突然弾かれたように大声を上げ、かばんに飛びつくツチノコ。それを不思議そうに見つめるサーバル。

かばん「た、食べないでください！」

ツチノコ「食べねえよ！」

サーバル「ああ！それ私とかばんちゃんのいつものくだけりなのにー！」

と、かばんのお馴染みのくだけりをツチノコとした後、改めてツチノコに話を聞く。

かばん「ツチノコさん、ミライさんを知ってるんですか？」

ツチノコ「ああ。てかよくよく見たらお前の帽子がミライと同じなだけで髪色とか格好とか色々違うな。ま、帽子も私が知ってるものより大部ボロくなってるが」

ツチノコがかばんをよく観察しながら呟く。

サーバル「でもツチノコ。何で知ってるの？ツチノコはボスの声を聞いただけじゃなかった？」

ツチノコ「は？何言ってるんだお前。お前とミライはずっと一緒にいたじゃねえか」

サーバル「え・えー?!うーん、よくわかんないや」

ツチノコの言葉に全身から？マークを出しながらサーバルが混乱する。そんな様子のサーバルにツチノコも混乱する。

ミミちゃん「博士。これはどうゆう事だと思えますか？」

コノハ「えーつとですな助手。本で読んだことがあるのです。人格やら記憶やらが一つの体に二つ以上持つ者があるそうです。きつとツチノコはその類なのです」

かばん「え？どういう事ですか？」

コノハ博士達の会話をなんとなく聞いてたかばんが興味深そうにコノハ博士達の会話に入ってくる。

ツチノコ「私なんだったってんだ？」



ツチノコも？マークだらけで頭がパンクしそうになってるサーバルと共にやってきた。

かばん「サーバルちゃん、大丈夫？」

サーバル「ごめん、ちよつと整理させて・・・」

そう言うときサーバルはそこから動かなくなつた。低スペのパソコンが膨大なタスクを処理するように。

コノハ「一つの体に二つ以上の人格を持つ者のことを多重人格者と言うのですよ。ツチノコはおそらくそれだと思つたのです」

ツチノコ「私が多重人格者・・・だと？自覚が無いのだが・・・」  
ミミ「多重人格者はお互いの人格の記憶は共有してない事が殆どなので、自覚ないのもやむなしです」

コノハ「記憶の共有をしていることもありますが、そもそも多重人格者の絶対数が少ないので希中の希です」

かばん「あ、じゃあ今のツチノコさんはぼく達が知らない時の記憶を持つてゐるって事ですよね？」

コノハ「そのはずですよ」

かばん「だったらツチノコさん。貴方の記憶を教えてくださいませんか？ミライさんのことを知ってるみたいですし、ぼく、すごく気になるんです」

ツチノコ「・・・まあ、ここは私が知つてるジャパリパークじゃ無さそうだし、別に構わねえよ。お前はミライ達以来のヒトみたいだしな。このパークに何があつたか、気になるなら聞かせてやるよ」

かばん「ありがとうございます！」

深々と頭を下げるかばん。それを見てツチノコは溜息を吐く。

ツチノコ「お前を見てるとやっぱミライと被るな・・・。ま、いい。まずジャパリパークとはなんなのか。かつてはどんな場所だったか説明する」

そう言うときツチノコはおもむろに語り始めた。

※アプリ版のネタバレ注意

(語り部 ツチノコ)

ジャパリパークは世界中に住む動物達を一箇所に集め、ヒトと触れ

合ったり研究したりする為に作られた巨大動物園だ。そこに空の彼方から突然降ってきた神秘の物質であるサンドスターに当たった動物達がこのような体になった。ここまでお前も知ってることだろう？

ここはまだいいとして、そんなジャパリパークにある日突然事件が起こったんだ。セルリアンだよ。パークの出入口となっていたパーク・セントラルにセルリアンが急襲したんだ。そのセルリアン騒ぎの時はジャパリパークは一旦閉園し、問題解決に急いでいた。

そんな平和じゃなくなったジャパリパークにて、またおかしなことが起きた。サーバルの偽物が現れたんだ。このサーバルは、そこでフリーズしてるのとは違う個体な。その偽サーバルはサーバルが持っていた「特別」、まあ「けもハーモニー」って奴だ。長くなるから細かい説明は省くが、偽サーバルの正体はそのけもハーモニーを奪ってサーバルに似た姿になったセルリアンだ。サーバルって呼ばれてたが。ん？サーバル？・・・まいいや。

サーバルはセルリアンの女王に、けもハーモニーを起こす特別を渡すため活動していた。その特別が女王に渡るとけもハーモニーならぬ「セルハーモニー」が起き、ジャパリパークは壊滅する。それを防ぐためにサーバル、それとカラカル、トキ、ルル（トムソングゼル）、シロサイ、ギンギツネ、ミライ、そしてジャパリパークの園長である「トワ」の八人で解決に向かった。この事件を「セルリアンの女王事件」と呼び、結局サーバルは特別を女王に渡さず、サーバルとの友情で覚醒し、フレンズとして女王相手にサーバル達とともに戦った。

無事解決したがこの後、とんでもない事件が起こる。  
それが超巨大黒セルリアンの強襲だ。このセルリアンの強さは女王の比じゃない程で、討伐に向かったフレンズ達も大勢食べられたり、大怪我を負わされたりひどい有様だった。

私も討伐に向かったが力及ばずボコボコにされた。そこらの動物とは一味も二味も違う実力を持つシーサーやオイナリサマ、カマイタチなどもそいつを大ダメージを負わせたりする事は出来たものの、完全に倒すまでにはいかずこちらのダメージの方が大きかった。

私が倒せるのかとか不安になってる時、ミライからこんな事を言わ

れた。『爆撃機により攻撃を開始しますので島の外へ避難してください』つてな。

「言われるがまま避難したが、爆撃機による攻撃でも黒セルリアンを完全に倒すことは出来なかった。そしてこれ以上は危険だと言う事でパークに居たスタツフなどのヒト達は皆パークの外へ出ていった。ミライは最後まで『この島にいる』と抵抗していたがやがて折れ、最後の思い出し、観覧車に乗ってから私たちに見送られながら去っていった。私達が残った理由か？セルリアンを倒すためだ。私を始めとしたただの動物じゃないフレンズやまだ生き残ってる皆が協力し黒セルリアンを倒そうとした。爆撃機の攻撃が思いの外効いていたのかかなり弱っていて倒せるかってギリギリの時、彼奴は退避していった。とどめを刺すため全員で突撃していったが、それが毘だったみたいだ。彼奴の逃げると見せかけたフェイントの最後の攻撃を攻撃することしか考えてなかった私達が避けられるはずもなく全員被弾だ。黒セルリアンとフレンズ軍の戦いはフレンズ軍の負けだ。」

ツチノコ「以上だ。最後のセルリアンの一撃を食らってからの記憶は霧がかかったかのように思い出せない。恐らくそこでもう一人の自分の人格が変わったのだろうな」

ツチノコの長い説明が終わり、過去について色々分かった為、かばん、ミミ、コノハはとてもまんぞく：：そんな顔をしていたがサーバルだけは処理が追いついてないのかまたフリーズしていた。

かばん「ジャパリパークの過去ってそんな壮絶だったんですね：：ミミ「話に出てきた黒セルリアンはもしかしなくとも『あの』セルリアンでしょうね」

コノハ「そうですね助手。我々で倒せたのは先人達の努力があつてこそだったんですね」

ツチノコ「え、お前らあいつを倒したのか!？」

ツチノコが仰天する。

コノハ「そうですね。かばんに助けられたパークの皆がかばんを助けるため勢揃いし、海に沈めました」

ミミ「それだけ、皆がかばんを助けるため必死になっていたってことでしょね」

ツチノコ「お前、すごいやつだな…」

ツチノコはかばんを見て心底感心する。

かばん「えへへ、ありがとうございます」

サーバル「かばんちゃんはすっごいんだよ！」

と、処理が終わったサーバルが自慢する。

ツチノコ「お前が威張ってどうすんだよ」

ツチノコのツツコミ。そして皆で笑い合う。

コノハ「あ、そうでした。忘れるところでした」

と、コノハ博士が思い出したように告げる。

コノハ「しんりんちほーの洞窟にてお酒が見つかったそうですよ。

確か『へびごろし』って名前ですが」

ツチノコ「へびごろしだど!?あの名酒が!」

ツチノコの目がチカチカと光り輝く。

ツチノコ「こうしちやいらねえ!今すぐに行く!」

ツチノコはコノハ博士から場所を聞くとダツシュで走っていった。

サーバル「あ、待ってー!私もいくー!」

かばん「ちよつとサーバルちゃん!待ってー!」

かばんとサーバルもツチノコのを追っていった。

ミミ「相変わらずサーバルは騒がしいですね。博士」

コノハ「そうですね助手。でも私一つ、サーバルに気付いたことがあるのです。」

あるのです。」

ミミ「博士。奇遇ですね。私もです」

コノハ・ミミ「ツチノコがサーバルの話をした時ー」

ツチノコは走りながら考えた。私がサーバルの話をした時、アイツが涙を流してたのは・・・多分アレだからだろうな・・・

### 第三話 ツチノコと仲間

ツチノコ「ところで、お前らが知ってるツチノコってどんなヤツなんだ？」

洞窟に向かう道中、ツチノコがサーバル、かばんにそれとなく質問をした。

サーバル「えーつとね、まずはとっても恥ずかしがり屋だったねー」  
かばん「うん。遺跡の壁から体を少しだけ出して大きい声を上げたり威嚇したりしてましたね」

ツチノコ「えー・・・それ小心者のやる事じゃないか・・・」

かばん「他にもやたら濁った声で奇声を上げてました」

ツチノコ「しつかりしろ！私！」

ツチノコが悔しそうに呟く。

サーバル「でもでも、すっごい所もあるんだよー」

かばん「ピット器官？だとかで赤外線が見れて、なんでもお見通しらしいですし、空気の匂いで何処が遺跡の出口かも分かるんですって。スゴイですよね！」

ツチノコ「まあ、凄いも何も私だがな・・・ただまあ、悪い気はしんな。さて、着いたぞ」

ツチノコの言うように目的地の洞窟はもう目の前だった。

サーバル「よーし！とつげきー！」

かばん「わああ待ってサーバルちゃん！プレーリーさんじゃないんだから突っ込まないでー！」

全速力で突っ走るサーバルに慌てて抑えるかばん。

ツチノコ「(いいコンビだな・・・)ま、落ち着け。騒いだら何が来るか分からんからな」

と、まるで仕事人のようなことを言うツチノコ。

かばん「まあ、慎重に行くことに越した事は無いでしょう」

サーバル、かばん、ツチノコは少しずつ洞窟の暗闇に入っていくた。

サーバル「くらいねー」

かばん「ちよつと怖いです・・・」

ツチノコ「静かにしろ。．．．何か居るぞ．．．」  
かばん「え！」

ツチノコ「気配を感じる」

サーバル「え・えー？どこー？」

何処までも呑気なサーバル。

そして暗闇から声が響く。

???「ふっふっふ。遂にアライさんの出番が来たのだ！」

???「アライさーん、それじゃ名前の???が意味無いよー」

ツチノコ「何言ってるんだアイツら」

意味不明なことを口走るフェネックに冷めた口調で呟くツチノコ。

フェネック「そして私らを隠すつもりも無い地の文さん」

ツチノコ「だからお前は何を言ってるんだ」

何処までもメタいフェネック。

アライさん「茶番はそこまでのだー！」

アライさんが仕切り直す。

アライさん「ふっふっふ、アライさん参上！ここから先は行かせないのだ！」

サーバル「え？何かあるの？」

フェネック「まあ特になにも無いんだけどねー」

サーバル「無いのー!?!」

かばん「じゃあなんでそんな事言っただんですか」

アライさん「それっぽい事言ってみたかったのだ」

ツチノコ「それよりも、お前ら酒を知らないか？」

ツチノコが強引に話を戻す。

フェネック「あー、それっぽいのはアライさんが見つけてたよー」

アライさん「これなのかー？」

アライさんが酒ビンを取り出す。

ツチノコ「おお！正しくそれだ！よくやったアライさん！」

ツチノコが珍しく興奮しながらアライさんに向かっていく。

アライさん「待ったなのだ！これはアライさんが先に見つけたのだ！そう簡単には渡せないのだ！」

サーバル「えー！なんでー」

アライさん「何故ならこれはアライさんのものだからなのだー」

フェネック「アライさーん、そこは渡した方が良いよー？」

アライさん「フェネック？」

フェネック「アライさん知らない？ツチノコってお酒が好物なんだよー？」

アライさん「えっ？そーなのかー？」

ツチノコ「・・・ああ」

恥ずかしそうにそっぽを向きつつ肯定する。

フェネック「そんな好物を目の前にして手に入れられ無いのは可哀想じゃないかなー？」

アライさん「うーん・・・」

フェネック「それに、お酒なんてアライさん飲めないよね？」

アライさん「フェネックう、そもそもお酒って何なのだ？」

ツチノコ「え、知らずに言ってたのか」

フェネック「えーっとお酒ってね、おいしいんだけど身体にはちよつと悪い飲み物なんだー」

アライさん「え、身体に悪いのか？」

ツチノコ「ま、まあ私ぐらいのけものじゃないと酒はちよつと厳しいかもな」

フェネック「そうだよアライさん。ここは譲ってあげよ？」

アライさん「ぐぬぬ・・・」

アライさんはフェネック達の説得に心が揺れ動いてるようだ。

フェネックは目で「出来るだけのことはやった。後はアライさん次第」という旨の事をツチノコに伝えた。

ツチノコはそれを目礼して返す。

アライさん「ぐぬぬ・・・」

アライさんはまだ悩んでいた。他のみんなはじつとアライさんの答えを待つ。

そして、三十分後・・・

アライさん「決めたのだ！」

遂に結論が出たようだ。

ツチノコ「なげえよ」

かばん「サーバルちゃん起きて」

サーバル「ん？ああ、やっと決まったの？」

サーバルに至っては昼寝をしていた。洞窟の地面が冷たくて気持ちいいらしい。

フェネツク「んで、どうするのー？」

アライさん「ふっふっふー。ツチノコ！アライさんと勝負するのだー！」

ツチノコ「え」

ツチノコは僅かに怯んだような顔を見せた。

サーバル「勝負？」

アライさん「そう！勝負なのだ！」

フェネツク「でもアライさん、勝負といっても色々あるよー？何するのー？」

アライさん「バトルなのだー！コブシとコブシのぶつかり合いなのだー！ツチノコにはアライさんスペシャルを食らわせて沈めてやるのだー！」

フェネツク「おーやる気だねー」

ツチノコ「・・・っぐ、マジか・・・」

ツチノコは心底嫌そうに顔を歪ませる。

アライさん「この勝負に勝てたら、おさけを譲ってやるのだ！でもアライさんが勝ったらあれはアライさんのものなのだ！それでいいかー？」

ツチノコ「・・・しゃーない、やってやるよ」

アライさん「よし！どんとこいな（シユン）・・・だ・・・？」

アライさんが喋ってる頃にはもう戦闘は開始されていた。ツチノコは猛スピードでアライさんの元に近づき、膝をアライさんの腹のギリギリのところで寸止めしていた。

かばん「この間、わずか0.2秒！」

サーバル「かばんちゃん急にどうしたの!？」



ツチノコ「数百年以上も人間から逃げ回っていた私の速さを舐めるなよ？伊達に「訊ねけもの」なんて呼ばれてねえんだ」

アライさん「・・・」

ツチノコ「今の膝が入っていただければお前はこの数週間、いや、数ヶ月以上は腹痛に悩む生活を強いられただろうな」

アライさん「んぐっ・・・」

フェネック「アライさん・・・」

ツチノコ「どうするよ？まだやるか？」

アライさんは俯いている。が、次の瞬間、輝かしい程の顔を上げこう言い張った。

アライさん「まだまだなのだ！アライさんのガッツはこんなもんじゃ無いのだ！」

ツチノコ「んなっ!？」

アライさん「まだまだ勝負は終わってないのだ！アライさんが諦めない限り、終わらないのだ！そしてアライさんが諦めるなんて万に一つでもありえないのだ！」

ツチノコ「つぐ・・・」

アライさん「さあ勝負なのだツチノコ！」

ツチノコ「・・・いや、もういい。私の負けだ」

ツチノコは消え入りそうな小さな声で呟いた。

アライさん「え・・・？」

サーバル「え、どうしてー？」

ツチノコ「そんなの決まってるだろ・・・」

ツチノコは恥ずかしそうにフードを深く被り、誰もいない方に言い放った。

ツチノコ「友達を傷つけて飲む酒がおいしい訳無いだろ・・・オレは仲間と笑いながら飲む酒の方がいい。お前を倒さないと手に入れない酒なんて、いくらへびごろしだろうと要らねえよ」

そう言うとツチノコはフードが千切れる程の勢いで目深に被り端っこで小さくなっていった。

かばん（あれ？今ツチノコさん・・・）

フェネック「いい事言うねー」

ツチノコ「うるせえ！突つつくな！」

サーバル「照れなくてもいいよ！実際かつこよかったよ！」  
ツチノコ「やめろやめろー!!」

ツチノコは猛スピードで走って壁の後ろに隠れた

フェネック「ねえアライさん。すごいよねーツチノコ」

アライさん「・・・」

アライさんは固まったまま微動だにしない。

フェネック「あれ？アライさん？」

アライさん「・・・」

フェネック「あー」

サーバル「あれ、フェネック、アライさんどうしたの？」

フェネック「アライさん気絶してるみたい」

皆「えええ!?!」

フェネック「アライさん、すごく感銘を受けると立ったまま固まっちゃうっていう何処そのペンギンみたいな事になるんだよねー」

ツチノコ「なんじゃそりや・・・」

フェネック「まあ面白いじゃん。・・・それとツチノコ。これ」

フェネックはツチノコにアライさんが持ってた酒ビンを手渡した。

ツチノコ「え、なんで・・・？」

フェネック「ほら、アライさん気絶しちゃったじゃん。これ、ツチノコの勝ちで良いんじゃないかな」

かばん「えー・・・？」

ツチノコ「ま、まあありがたく貰っておくよ」

フェネック「そういえば、カバがなにか面白いもの見つけたって  
言ってたよー。行ってみたらどうかかなー？」

ツチノコ「なに!?!だったら行く！よし、サーバル、かばん！着いて  
こい！」

サーバル「わー待って！」

かばん「置いてかないでくださいーい！」

フェネック「行っちゃったなー。さて、私はアライさんの目覚めを

待とうかな」

くサバナナの水場への道中く

かばん「色々ありました、無事お酒を手に入れることが出来て良かったですね」

ツチノコ「ああ、これはアライさんとフェネック、そしてキノハとミミのお陰だ・・・よ・・・？アレ？」

サーバル「どうしたの？」

ツチノコ「これ、よく見たら「へびごろし」じゃなくて「べいひろごし」じゃねえか！つかなんだ「べいひろごし」って！業界用語か！」

かばん「落ち着いてツチノコさん！」

サーバル「熱くなりすぎだよ！」

結局、へびごろしでは無かったとき。

## 第四話 ツチノコとさばんな

「さばんなちほーに帰ってきたよおお!!」

「うるっさいなあ!」

さばんなちほーに着いたツチノコ一行。さばんなに着いたと同時に上のやり取り。

「いやあ、さばんなちほーはかばんちゃんに会って以来だなあ。ああ、いい安心感がする」

「聞いちやいねえ・・・」

「ははは・・・」

そんなツチノコの苦言をもともせずご機嫌なサーバル。

そんなサーバルに呆れるツチノコとかばんちゃん。

「そうだかばんちゃん、初めて出会ったときの草原に行こうよ!」

「え、でもどこもかしこも同じような風景なんだけど、場所分かるかな・・・?」

「そこまでだ!ここに来たのはカバに話を聞くためだ。ジャパリパーク探検ならまたの機会にしな」

どこまでも呑気なサーバルに喝を入れるツチノコ。

「はーい」

「え、やけに聞き分けがいいな」

「怒られちゃったからねー」

カバの居る水場に向かいながらそんなことを駄弁っていた一行。そこに、あるけものがやってきた。

「あ、サーバルじゃん。久しぶりー」

「あ、トムソングゼル!」

アニメで不動明王の烙印を押されたトムソングゼルのフレndsである。

「君は確かかばんだっけ?ウワサは聞いてるよ!命懸けでセルリアンからサーバルを守ったって!」

「えへへ、ありがとうございます」

「トムソングゼルは、ガゼルの仲間の中じゃ、特に逃げ足が速いんだ。

スピードに乗れば、あのチーターからも逃げられるんだって」  
ラッキービーストからの解説が入る。

「あれ？今誰が話したの？」

「ボスだよ！ボスって喋れたんだって！」

何故かサーバルが自慢げに言う。

「え？でもボス何処にいるの？」

「ラッキーさんはここに」

と、かばんちゃんが腕をあげ、ラッキーウォッチをトムソングゼルに見せる。

「え!?これボスなの!？」

「前の戦いでこんな小さくなっちゃったんだけど、平気みたいだよ」  
「へ、へえ、色々といい発見だった。それより、何でツチノコも居るの？  
?というか何でこんな近いの？」

トムソングゼルは、かなり距離を詰めてガン見してくるツチノコに話題を振る。

「いや、ルルはあまり変わりねえんだなと思つて」

「え、ルル？」

聞きなれない言葉にサーバルがつかさず反応する。

「ルルつてのは私が知ってる時代のトムソングゼルの愛称だよ」

「えつと、ツチノコは一体何を言ってるの？」

「ああ、ツチノコさんのことはぼくが説明します」

かばん説明中・・・

「そんなことがあるんだねえ・・・」

トムソングゼルことルルはよく理解出来たような、出来てないような、微妙な顔をしていた。

「それよりさ、ルルつて名前いいね！わたし、これからトムソングゼルのことルルつて呼ぶよ！」

サーバルはトムソングゼルのルルという愛称をえらく気に入った様子。

「そう？だったら私もこれからはルルつて名乗るよ！こっちの方が可愛いしねえ」

「もういいか？私らはカバに用があるんだ」  
「立つたら私も着いてくよ！良いでしょ？」

ルルが目を輝かせながら聞く。

「何にそんな期待してるのか知らんが、好きにしたらいいよ」  
「やったー！ありがとうツチノコ！」

「それじゃ、カバさんのところに行きましようか」

かばんちゃんが仕切り直してカバの元へ向かう。途中で、

「ん！誰かが見てる！」

ルルが飛び跳ねながら視線を感じる方へ向く。

「流石ルルさん。伊達に「サバンナのおやつ」とは呼ばれてませんね。  
私の気配に気づくとは」

「う、私の動物時代の話はやめてー！で、でもさ、サバンナのおやつは  
シマウマも対して変わんないんじゃないの!？」

「私のシマシマは意外と見つかりにくいものなのですよ？」

「あれはサバンナシマウマだね。シマウマは住む場所によって体の模  
様が違っているんだ。サバンナシマウマは後半身の縞模様の幅が広  
く、おなかまで模様が伸びてるのが特徴だよ」

ラッキービーストがかばんちゃんに解説をする。

「んで、私たちに何か用なの？」

ルルが改めて聞く。

「いえ、ちょっと皆さんに言いたいことがあるんです」  
「言いたいこと？なんだ？」

ツチノコが聞くと、サバンナシマウマはおもむろに口を開けた。  
「サバンナシマシマオオナメクジって何ですか!?!サバンナシマシマオ  
オナメクジモドキって何ですか!?!以上です！」

サバンナシマウマは早口にそう言うときつさと行ってしまった。

「何が言いたかったんだろう?？」

「さあ?？」

「どうなんでしょう?ラッキーさん」

「ボクらには絶対理解できないことだね」

「ああもういいから、さつさと行こうぜ」

ツチノコは早足に歩を進める。慌てて着いていくかばんちゃん、サーバル、ルル。

そして、

「着いたよ！水場！」

「ここにカバが居るんだっけか」

「そのはずですよ」

「私のど乾いたよ」

四人とも思い思いの行動を起こす。

「じゃあさ、かばんちゃんとツチノコでカバの話聞いておいて。わたしとルルは遊んでるからさ」

「うん、わかった」

サーバルの妙な提案を素直に受け入れるツチノコ。そして、

「カバさーん！居ますかー！」

かばんが呼びかける。すると、

「だあれええ？」

妙に間延びした声が聞こえてきた。

「お久しぶりですカバさん。元気にしてました？」

「あら、かばんじゃない。あなたこそ健康そうで何よりですわ」

厳しくも優しく、かばんちゃんが（サーバルを除く）初めて会話したフレンドであるカバ。

「して、今日はツチノコもいるんですね。珍しいですわね？」

「そうだな。私はあんまこの辺には来ないしな」

「そんなツチノコがここまで来るってことは何かあったのですの？それとも私に用でもあるんですの？」

「フェネックから聞いたんだ。お前が何か面白いものを見つけたって。何を見つけたんだ？」

「ああ、これの事だと思えますわ」

そう言うとカバは懐から青く光る耳が付いた「の」マークがついた貨幣を取り出した。

「ん？これはジャパリコインか。ふむ、中々面白そうなものだな」

「もしよろしければあげますわ。私が持っても特に使えませんし」

「お、そうか？ならありがたく頂くよ。それじゃ私らはこの辺で」

「あれ？もう行きますの？でしたら、これからもっと暑くなるので、水分補給を大事にしていきますのよ？」

「ああ、ルル、サーバル、行くぞ？」

ツチノコがまた歩きだそうとしたが、

「それと、セルリアンが出たら、極力戦わずに逃げるんですのよ？」

と、遠くからカバが助言をしてくる。

「おう大丈夫だ」

と返事をし、進んでこうとした時

「それとジャングルのジャガーとカワウソが面白いものを見つけたって言ってましたわ。あなた達も見ていったら？」

「よしサーバル、かばん、ルル！ジャングルヘダツシユだ！」

ツチノコが目の色を変えて走っていった。

「あーツチノコー!!」

「待ってくださいーい！」

「わー、スツゴイ速いねー！」

慌ててサーバル達もツチノコの後を追いかけて行く。

「サーバルはともかく、ツチノコまでああも落ち着きがないとはねえ。ま、好奇心旺盛なことは決して悪いことではありませんわ」

そういうとカバは水の中へ入っていった。



## 第五話 ツチノコとじゃんぐる 前編

「ねえツチノコ！さばんなちほーからじゃんぐるちほーまで来たけどせつかくだしここに居るみんなでジャパリパーク探検しない？」

じゃんぐるちほーにやってきた一行。サーバルのそんな提案から物語が始まる。

「うん。あたしそれ賛成！かばんのこと、もっともっと知りたいしね」それに賛同するのはルルことトムソングゼル。

「ツチノコさんはどうします？」

かばんちゃんがツチノコに話しかける。

「ふむ・・・悪くないな・・・このジャパリパークがどんな場所か気になるしな」

「じゃあ決まりだねー！楽しみだなー！」

サーバルがハイテンションで叫ぶ。

「なんでコイツはこんな元気なんだよ・・・」

ツチノコが呆れ気味に呟くが、

「まあまあ、それがサーバルの良さなんだから」

と、ルルがフォローを入れる。と、そこに

「あ、あの方は・・・」

「あれ？サーバル？とツチノコにルル？珍しいね？そしてあなたがかばん？」

何故か必ず疑問形で話すちよつとおかしなフレンズであるオセロットだ。

「あ、はい。かばんです」

「オセロットは、ネコ科では珍しく泳ぎがとっても得意なんだ。その点はジャガーと似てるね。また、同じオセロット属であるマーゲイと瓜二つでマーゲイは『ツリーオセロット』って言われているほどなんだ」

ラッキーさんの解説が入る。

「オセロット！この前は寝てたけど今日は起きてるんだね！」

「だってオセロットだもの？」

「やっぱりこの子は何言ってるのかよく分かんないなあ」

ルルが少し笑いながら言った。

「オセロットはぜんっぜん変わってないんだな。ちよつと声が違いうくらいか」

「あなた何言ってるの？」

「お前にだけは言われたくない！」

しかし、ツチノコの事情を知らない子から見るとツチノコは発言はなんのことか全然分からん。

「ああ、ツチノコさんは・・・」

かばん説明中・・・

「ふーん？面白いね？」

「いや聞かれてもよ・・・」

そういう喋り方だから仕方ない。

「サーバル達はどこまで行くの？」

「わたしたちが旅したルートそのままじゃパリパークの探検するんだ！」

「今度はあたしも一緒にね」

ルルが付け足す。

「そうなの？じゃあ気を付けてね？」

「はい。ありがとうございますオセロットさん」

オセロットと別れた。

「次は誰に会えるかな？」

「ぼくはマレーバクさんとお話してみたいな」

「話したことないの？」

ルルが素朴な疑問をぶつける。

「はい。前あった時は遠くでじゃぱりまん食べてる姿を見かけたただけでしたから」

「あの一、私に何か用ですか？」

「うわっ！いい、居たんですか！」

「私のこの模様は意外と見つかりにくいんですよ」

「シマウマと同じだねー」

彼女は黒と白の体色が特徴的な、マレーバクだ。

「マレーバクはゾウのような長い鼻と白黒模様の体が特徴の草食動物だよ。あんまりイメージには無いけど、水辺によく居るんだ」

「会いたかったんですよマレーバクさん！」

かばんちゃんが目を輝かせながらマレーバクに詰め寄る。

「え、な、何でですか？なにが裏があるんですか・・・？」

「無いよ！」

何故かサーバルが応える。

「あなたには聞いてないんですが・・・」

「あつごめんね」

「別に裏なんて無いです。純粹に仲良くしたいだけですよ」

かばんちゃんが説得するが、

「うーん、でもどうして私なんかと・・・？」

マレーバクの疑心暗鬼さは変わらない。

「な、なんでって言われても・・・」

かばんちゃんが戸惑いながら言葉を紡ごうとしたら、

「マレーバクはとにかく疑心暗鬼なんだ。こんな様子なのは性格なんだから許してやってくれ」

「そ、そうですか」

ツチノコがかばんちゃんを諭した。

「それにマレーバクも。かばんに裏なんてない。信じてやれ」

「は、はい」

マレーバクも首を縦に振る。

「え、えつと、かばんさんの活躍はジャガーさん達から聞いています。あなたを疑ってしまつてごめんなさい。こんな私ですが、仲良くしてくださいませか？」

「勿論です！これからよろしくお願いしますね。マレーバクさん！」

「こ、こちらこそ」

マレーバクとかばんちゃんが握手をする。

「仲良くなれて良かったね。かばんちゃん！」

「うん！」

「私、疑心暗鬼なのは直らないかもですが、あなたは信じてても良いかも

「知れないです」

「うん！じゃあまたねマレーバク！」

「はい！また！」

マレーバクと別れた。

「次は誰に会えるかな？あたしもワクワクするよ！」

ルルが飛び跳ねながらテンション高めに話す。

「次は誰に会ったんだっけ？かばんちゃん」

「えっと、フォッサさんだっけ？」

三人の会話を聞いてたツチノコが言う。

「噂をすれば」

「何とやらってヤツだねー。久しぶり！かばん」

「フォッサさん！」

長くて大きい尻尾が特徴的なフォッサだ。

「フォッサは、とある場所で生態系の頂点に立つけものだよ。身軽で木登りが得意で、その場所では百獣の王とも言われてたんだ」

「いやー、かばん。セルリアン戦では大活躍だったらしいじゃない？

私も助太刀にいきたかったなあ」

「そういえばフォッサはどうして来なかったの？」

サーバルが訊く。

「いやー、ボスがジャガーとカワウソにしか声掛けなかったから私らは全然知らなかったんだよ」

「なるほど・・・ラッキーさんはどれもむの・・・いややめときましよう」

何かを言いかけたかばんちゃんだったが思い留まった。

「お、お前・・・ホントにフォッサなのか・・・？」

超衝撃を受けた様子のツチノコが狼狽えながらフォッサに声をかける。

「ん？君は？」

「私はツチノコだ。私の知ってるフォッサと違いすぎて若干やどころじゃなく戸惑ってる」

「ツチノコ？いや知ってるも何も、私とキミは初対面だと思うけど・・・

どこかで遭った？」

「ツチノコさん、フォッサさんはツチノコさんの状況知らないの今この状況でお話しても混乱させるだけですよ」

「あ、ああそうか」

ツチノコが言うのと、かばんちゃんがフォッサに事情を説明した。

「へ、へえ、よく分からないが、そんな事もあるんだね・・・」

フォッサは若干や混乱しつつ、状況が飲み込めたようだ。

「それで、キミの知ってる私ってどんな子なの？」

「そうだな。一言で言えば強者マニアだな」

「『強者マニア??』」

かばんちゃん、サーバル、ルル、フォッサの声が綺麗にハモる。

「ああ、『自分はお飾りな王だ、井の中の蛙だ』って何度も言いながら、自分の実力が外でも通用するように本物の王になる為に色んなけものに勝負を挑むような奴だ」

「かっつっこいい!!!」

ルルとサーバルが目を輝かせながら叫ぶ。

「でもあまりにもしつこいからあるけものからは住処に進入禁止にされてたがな」

ツチノコが軽く笑いながら呟く。

「え、だ、誰?」

フォッサがツチノコに詰め寄る。

「えーっと、確かそこに居るキングゴブラだったかな」

「キングゴブラ!? ってか居たの!?!」

「ああ、大勢集まって何をしてるのかと思ってな」

フォッサが驚いて後ろを振り返る。そこに居たのはヘビの王の中の王、キングゴブラだ。

「キングゴブラは象をも咬み殺す世界最大のヘビだよ。毒性はそこまですごいわけじゃ無いけど、一度に注入される毒の量が他のヘビの比較にならない程の多さだよ」

「ええ!? すつごーい!!」

サーバルがラッキーさんの解説に素直に感心する。

「その象も居るがな」

「こんにちわ〜」

キングゴブラの後ろからインドゾウが顔を出した。

「インドゾウはアジアゾウ類の代表種だよ。同じフレンズ化が確認されたゾウはアフリカゾウも居るけど、そのアフリカゾウよりは小さいんだ。それでも動物全体から見ても大きい部類に入るよ」

「ね、ねえキングゴブラ。私、一世代前だとあなたに結構嫌われてたみたいなんだけど・・・」

フォッサが少し言い難いようにキングゴブラに声をかける。

「・・・それが何だ？」

「えっ？」

しかしキングゴブラは全く気にした素振りを見せずに言った。

「前世代の話を何処から聞いたのか知らんが、今の私にそれを言うて何になると言うんだ。まさかお前は私をそれだけで友達を辞めるような薄情者とでも思っていたのか？」

「う・・・」

「民・・・いや友の話をしっかり聞き、相談事でもあればどんなに時間を割いてでも解決してやるのが私の理想だ。フォッサ。今の私達は仲良くしような」

「うん!!」

フォッサが満面の笑みで応える。

「でもまあ、別に仲悪かった訳じゃ無いんだけどな」

ツチノコが呟く。

「む、お前はツチノコか。何故ジャングルに居るんだ？」

「ジャパリパークを探検中だ。ルルとサーバルとかばんと共にな」

「そうか。それは楽しそうでいいな」

「んで、お前はどんなんだ？まだ誰かに命令されたら断れないのか？

答えろ」

「ああ、命令されるとつい・・・な。というか何でお前が知ってる？話したことあったか？」

「私はお前の事は前世まで知ってるからな」

「どういうことだよ」

キングゴブラが眉をひそめる。

「かばん。任せた」

「はい！」

かばんちゃん説明中

「ふーん、なるほどな」

「大変だね」

かばんちゃんの話聞いてたインドゾウもツチノコに声をかける。

「じゃあツチノコ達の旅がいい物になるよう、私が踊ってあげるわ」

インドゾウが言う。

「お前は踊りたいだけだろ」

「あー、ばれた〜？」

キングゴブラの鋭いツツコミが入る。

「じゃあ私らはもう行くよ」

ルルが別れを告げる。

「ああ、また会ったらもつと話そうな」

「私の踊りも見せてあげるわ」

「頑張つてきなよー！」

キングゴブラ、インドゾウ、フォッサが応える。

「さて、次は誰だろうな」

「確か・・・あ、居ましたー！」

かばんちゃんが声を上げる。

「ん？あ、お前らか。久しぶりだね」

そう応えるのは角の双剣のような武器が特徴的なアクシスジカだ。

「アクシスジカはチャールという名前を持つてるんだ。これはとある地方だと『斑点がある』という意味で、その名の通り身体中の斑点が特徴的なものだよ」

「久しぶりアクシスジカ！また土食べてるのー？」

「うん。良い感じに塩味が効いてるし、体にもいいし最高だよ」

アクシスジカが武器に着いてる土を口に運びながら言う。

「お前らも食う？特にルル」

「え、あたし!!？」

ルルが心底ビツクリしたように叫ぶ。

「大丈夫。美味しいよ」

「いやそうじゃなくて・・・」

「ルル」

「なに？」

ツチノコがルルの肩に手を置き、こういった。

「まあ、頑張れよ」

「えー・・・」

言いながらルルはアクシスジカの元へ行き、土を分けてもらった。

「そういえば、ツチノコさん、アクシスジカさんはそんなに変わってないんですか？」

「いや、私が生きてた時代にはアクシスジカの子は居なかったな。新種だ」

「へえ、そうなんだ！」

サーバルが元気に答える。

「うわーん！土は舐めたくないよー！」

ルルは手にアクシスジカからもらった土を持ちながら涙目で言った。

「大丈夫だよ。健康にもいいし」

「そういう問題じゃなくてー!!」

「健康によく、美味しいからと言って、土を食べるのは流石に・・・」

かばんちゃんも少し引きながら言う。

「大丈夫だルル。トムソングゼルは土食うから」

「適当なこと言わないでー!!」

ルルがへ↑こんな目になりながら抗議する。

「ねールル食べないのー？じゃあわたしがたべるよ」

「えっ」

ルルへサーバルの助け舟が来た。

「食べてみたかったんだよねー」



サーバルはルルが持つてる土をひったくるとなんの躊躇いもなく口に運んだ。

「えっ」

「ひっ」

思わずかばんちゃんもルルが声を漏らす。

「うーん。食感はいりりいりしてるけど、確かに塩味で美味しいね。癖になるかも！」

「でしょでしょ？おかわりはまだまだあるよ！」

「わーい！」

こうしてサーバルは土愛好会の一員になったとき。めでたしめでたし。

「終わらせないでー!!」

「誰に言ってるんだ？」

メタ発言するルルにツツコミを入れるツチノコ。

「ねえ、かばんちゃんも食べよー！美味しいよこれ！」

「えっ」

サーバルの提案に顔を引きつらせるかばんちゃん。

「で、でも……」

「大丈夫大丈夫。味はわたしが保証するよ」

「健康面に関しては私が保証する」

アクシスジカも声をかける。

「……分かりました。ぼくも覚悟を決めます！」

「えっ!?!」

ルルが驚きの声を上げる。

「かばんが覚悟を決めるのなら私もやってやる」

「えっ!?!」

ツチノコもかばんちゃんに乗っかるように来た。

「おお、ツチノコも！嬉しいよ！」

アクシスジカは目を輝かせながら言った。

「ツチノコは名前からしてこれ行けると思うしねー」

「いやこの『ツチ』は『土』じゃなくて『槌』って意味なんだがな」

「じゃあはい。ツチノコ、かばん」

アクシスジカが土を二人に分ける。

(ぼくは、サーバルちゃんを信じる!)

(ルルが乗ってきたらあの流れが出来たのにな・・・ま、しゃーない。ただこう)

各々そんなこと思いながら土を食べる。

「あれ、意外と良いかも」

「ふむ、悪くないな」

「やったー!!」

二人の感想にアクシスジカとサーバルがハイタッチをする。

「食感がちよつと気持ち悪いが癖になるかもな」

「口の中になにか残るような感覚になりますけど、そこまで悪くないです。むしろいけますね」

言いながら二口目を運ぶ二人。

「やったやった!土の時代来た!」

「そんな時代やだよ!」

ルルが懸命に突っ込む。

「で、ルルはどうするの?」

「食べるですか?食べないですか?」

「博士助手みたいに言わないでー!」

言いながらルルは土を手取る。

「あれ?食べるの?」

アクシスジカが言う。

「だって食べないと終わらないでしょー!!」

ルルが涙目で叫ぶ。

「あの、ルルさん。無理はしなくていいですよ?」

「ああ、嫌だというなら私らも強要したりはしない」

「頑張っ!ルル!」

そしてルルはこう呟いた。

「ラビラビ、あたしに勇気を・・・」

言いながらルルは土を食べた。

「・・・あれ？美味しい」

「でしょでしょ！」

サーバルがルルに飛び付く。

「ごめん阿克苏ジカ！食わず嫌いしてた！」

「良いんだよ分かってくれば。まだまだ土はあるよ。もつと食べるか？」

「うん！」

「じゃあわたしも！」

「じゃ、じゃあぼくも。ツチノコさんは・・・ツチノコさん？」

かばんちゃんは深刻そうな顔をしてルルを見つめるツチノコを認め、声をかけた。

「う、うん？なんだ？」

「いや、なんか様子がおかしかったので、大丈夫ですか？」

「あ、ああ大丈夫だ。気にするな。それより土を食べようか」

「あ、はい」

こうして四人は土パーティを満喫した。

## 第六話 ツチノコとじゃんぐる 中編

「わああ、増えてる〜！あ、あっち行ってよー！」

開始早々、一行に威嚇をするのはミナミコアリクイだ。

「ミナミコアリクイは両足で立って手を広げて身体を大きくみせる威嚇が特徴だね。そのポーズは怖いどころか逆に可愛いのも特徴だよ」  
「このポーズはかわいいだけじゃないんだよー！」

そんなラツキーさんの解説に抗議するミナミコアリクイ。

「えー？でもそのポーズ、とつてもかわいいよ？」

サーバルが無邪気に言う。

「そ、そう？」

だが、素直に可愛いと言われ、ミナミコアリクイも満更でもないようだ。

「でも可愛かったら威嚇の意味無いんじゃない？」

「しーっ！それ言っちゃダメです！」

ルルが至極真つ当な意見をし、かばんちゃんが慌てて嗜める。

「かわいい問題なら大丈夫だよ。私には威嚇以外にも色々ポーズあるからね」

「なんの解決にもなっていないが」

ツチノコが突っ込むが、ミナミコアリクイは取り合わなかった。

「行くよー！これがしようぶ！のポーズ！」

そういうとミナミコアリクイは大きく手を広げて、仁王立ちした。

「あれ？威嚇と変わらなくなる？」

「威嚇との違いが分からないなんてあなたもまだまだだね！」

「ええっ!？」

ルルの素朴な疑問に自信満々の表情で返すミナミコアリクイ。

「このポーズ、さつきとはね・・・」

そこで言葉を切って溜める。ルル、サーバルは固唾を飲んで続きを待ち、かばんちゃんは困惑顔、ツチノコは無表情でミナミコアリクイを見つめる。

「私が奮い立ってるんだー!!」

ミナミコアリクイはそう叫んだが、サーバル達の反応は芳しくなかった。驚き一割、戸惑い九割的な感じ。

「・・・あれ?」

その微妙な空気に先に声を上げたのはミナミコアリクイだ。

「おかしいな。外見では絶対わからないポーズ変化つてことでジャングルの皆には喜んで貰えたのに」

「いやその前によ・・・」

呆れながらツチノコが口を開く。

「外見では絶対わからないんじゃ、ポーズとは言えないだろ」

「あーっ!!」

その言葉と共にミナミコアリクイは威嚇の時よりも大きく手を開いた。

「あ、これビツクリのポーズ」

「大して変わらないよ!」

今度はサーバルもツツコミに回る。

「ここまでボケ倒しのフレンズがいたとはな・・・」

ツチノコも頭に手を置き、ため息を吐く。

「ま、面白いから一緒に居ると飽きないかもな」

「じゃあぼくらはそろそろ・・・」

かばんちゃんがミナミコアリクイに別れを告げようとするが、

「待って待って!最後にひとつだけお願いを聞いてー!」

「うわちよっと!」

ミナミコアリクイは必死にかばんちゃんにしがみついた。その急な行動にかばんちゃんも体勢を崩しそうになる。

「コラコラ、危ないから止めな」

ツチノコが嗜める。

そういうとミナミコアリクイは素直にかばんちゃんを開放した。

「で、お願いって?」

サーバルが改めてミナミコアリクイに向き合った。

「うん、私、ルルみたいな可愛いアダ名が欲しい!」

「アダ名?」

ツチノコが反芻する。

「うん。ミナミコアリクイって長いじゃん。だから短くて可愛い名前が欲しいの」

「そうは言っても、私の時代でもお前はミナミコアリクイって呼ばれてたからなあ。どうしたもんか」

ツチノコが悩みながらミナミコアリクイを正面に見据える。

「・・・決めた！お前はナミコ。ミナミコアリクイのナミコでどうだ？」

「ナミコ・・・」

ミナミコアリクイ・・・いやナミコはその名を復唱する。

「うん。いいね！これからはナミコって名乗るよ！ありがとうツチノコ!!」

「気に入って貰えたなら何よりだ」

ツチノコもナミコの反応を見て満足気に頷く。

「じゃあぼくらはこれで」

今度こそ、かばんちゃんが別れを告げる。

「うん。ありがとう！これ、感謝のポーズ！」

「だから同じじゃん！」

相変わらず威嚇と同じポーズを取るナミコに皆でツツコミを入れる。

「クジャクです」

次に会ったフレンズは尾羽が見事な鳥であるクジャクだ。かつてかばんちゃん達と会ったときと同じような挨拶をする。

「クジャクといえばオスがメスを誘うために広げる尾羽が特徴的だね。実はこの羽根には、神経毒に耐性があるんだ。だからサソリなどの毒虫も食えることが出来、益鳥として尊ばれてるんだ」

「あら。ボスは流石詳しいですね」

クジャクはラッキーさんの解説に感心した様子を見せた。

「クジャクの羽はホントキレイだねー」

サーバルがジロジロと尾羽を見つめながらつぶやく。

「ええ、毎日の手入れは欠かせませんから」

クジャクは自慢げに腰に手を当てて尾羽を強調した。

「ホント綺麗・・・」

ルルが思わず言葉を漏らす。それだけクジャクの尾羽は見事だった。

「どんな手入れしてるんですか?」

「ふふ、それは秘密です」

かばんちゃんの質問を鮮やかに受け流す。

「にしてもクジャク。随分油断してるな」

「え、何がですか?」

妙なことを言うツチノコに怪訝な顔で聞き返す。

「いやそんな悠長にしてて、ミミヤコノハは大丈夫なのか?」

「え、博士と助手ですか?彼女達が何か?」

クジャクは何が言いたいのか本気で分からないように酷く困惑している（世代のくだりは既に説明したということだ）。

「いや、私の時代だとコノハとミミがお前の羽を研究目当てで引き抜きまくってたぞ」

「「「えっ!!」」」

ツチノコ以外の全員の声が綺麗にハモる。

「やっぱ衝撃的だったか?」

「うそ・・・怖いです・・・」

ツチノコのカミングアウトにクジャクは結構本気で怖がっていた。

「まあ安心しなよ。あくまでも私の世代のコノハとミミだ。今のあいつらなら大丈夫だろうよ」

「ホントですか!?!」

クジャクが目を輝かせるが、

「・・・たぶん」

ツチノコは目をそらしてポツリと呟いた。

「えっ」

「きつと、おそろく、メイビー」

「うぐっ!」

ツチノコの追撃でクジャクは息を呑む。

「ま、まあまあクジヤクさん。今まで大丈夫だったんですから、きつと大丈夫ですよ」

見かねたかばんちゃんが助け舟を出した。

「そうですか・・・そうですね！流石に大丈夫ですよね！」

「そうだよそうだよ！」

「元気出して！」

かばんちゃんに続き、ルル、サーバルもクジヤクを励ます。

「皆さん・・・ありがとうございます！」

すっかり元気を取り戻した様子のクジヤク。しかし、

「ちなみにお前も他人の羽ちぎってたぞ」

「ぐはっ！」

ツチノコの更なる追撃でその元気は脆くも儂く崩れてく。

「ツチノコ！」

流石にサーバルはツチノコを咎める。

「とうかツチノコさんわざとですよね！クジヤクさんの反応見たさで！」

「ははっバレた？」

「認めた!？」

ツチノコの内情を当てたかばんちゃんが逆に驚く。

「ちなみに誰の羽をちぎったの？博士？助手？」

ルルが興味本位で聞く。

「え？ああ、スザクだよ。四神の」

「」「えっ」「」

またも綺麗にハモリ、四人の時間が止まる。

「クジヤクより綺麗な羽根を持つフレンズであるスザクに会いに行つたときに、ブチツと」

「クジヤク・・・勇気あるね」

ルルが感心したように呟く。

「いえいえ、私じゃなくて、先代の私ですから！」

「コノハ達が来たたらあいつらの羽根もちぎってやれ」

「だから出来ません！」



「だったら豪華絢爛虹色尾羽でも使ってな」

「返り討ちにするのも嫌ですからー!!」

「二・・・二」

ツチノコとクジャクの応酬に呆気にとられるサーバル達。

「ま、色々言ったが、心配しなくても大丈夫だよ。私が保証する」

「うーん・・・杞憂で終わることを祈ります」

「じゃあ、そろそろ行くね。バイバイクジャク!」

「ええ、また」

クジャクと別れた。

「タスマニアデビルだぞー!」

次に会った子はタスマニアデビルだ。

「タスマニアデビルは、デビルという名のつく由来になった恐ろしい声の特徴だよ。また噛む力も強く、骨・皮・毛・羽等、何でもバリバリと噛み砕いて食べてしまうんだ」

「へえすつごーい!!」

「ふっふっふ、恐ろしいだろ? そう思ったのなら早々この俺の前から立ち去ることだな!」

「えー? お友達になろうよ!」

「うなっ!」

「タビーはあいも変わらず他人と関わるのを嫌うんだな」

「タビー? なんだそれ?」

「愛称ですか?」

「ああそうだ」

「この俺をそんな愛称で呼ぶなあ!」

タスマニアデビル・・・タビーは思いつきり威嚇するが、当の四人は特に気にした様子も見せない。

「タビー? いいじゃんそれ! かわいいアダ名だね!」

「とても素敵ですね!」

「あああ!! 止める! 止めてください!!」

「え、敬語ですか?」

愛称を褒めてたら思いがけず聞けた敬語にかばんちゃんが反応する。

「あ、あの?」

だがタビーは恥ずかしさのあまり悶絶している。

「そんな恥ずかしがらなくてもいいのに」

「わたしも愛称欲しいなあ」

「サーバルが?・・・だったらサーバルだしサツちゃんはどう?」

「サツちゃん!? 良いかもそれ!」

勝手に愛称談義で盛り上がってるサーバルとルルを尻目にかばんちゃんはタビーに話しかける。

「あのー、タビーさん?」

「な、なあ・・・」

「え、はい」

タビーの震え声にかばんちゃんが返事をする。

「た、タビーって愛称って、か、かわいい、のか・・・!?」

「え、ええ、かわいいと思いますよ」

真っ直ぐタビーに向けて放たれたその言葉に、タビーはまた赤面してしまう。

「ふむ、怖がりから重度の恥ずかしがり屋になった感じか。それを隠すため懸命に怖いふりをする姿は中々愛嬌があるものだ」

ツチノコが誰かに聞かせるわけでもなくボソリと呟いた。

「じゃ、じゃあこんな俺でも友達になつてくれるか?」

「ええ、勿論ですよ」

「おお・・・あ、ありがとう。じゃあ、改めて俺はタスマニアデビル! 怖いだろー!!」

「改めてよろしくお願いしますね。タビーさん!」

「その愛称は恥ずかしいから止めてくれ!」

一方、

「やつぱりサツちゃんは無くないかな。せめてサーさんが良いよ。こっちの方がおねーさんっぽいし」

「えー?サーバルがおねーさんなんて似合わないよ!ここはあたしが

ルーさんがいいよー!」

「ルーさんっておねーさんというよりおじさんみたいだよ?」

「なんでえ!」

この二人はまだ愛称談義をしていた。

「うわあ!び、ビックリしたあ!」

次に会ったのはエリマキトカゲ。

「エリマキトカゲはその首の周りのエリマキが特徴だね。これは威嚇の他にも体温調節にも使われてて、暑いところはある程度平気なんだって」

「そのエリマキ、わたしも欲しいなあ」

「ええ?ダメだダメだ。これは私の大事なエリマキさ」

エリマキトカゲはサーバルの羨ましがな視線を払い除ける。

「そうだ。エリマキトカゲにはなんか愛称無いの?」

ルルが疑問をツチノコに投げる。

「愛称か?エリーつてのがあったぞ」

「エリーなんて愛称やめろー!」

ツチノコの答えにエリーは激しく反応を見せる。

「このくんだり、タビーさんともやりましたね」

「そうだな。被ったな」

かばんちゃんとツチノコが小声で呟き合う。

「なんでかわいい愛称が嫌なの?」

タビーのときと同じように疑問を持つルル。

「ルルは別にその愛称恥ずかしくないもんね?」

「むしろ誇らしいとさえ思うよ。エリーの気持ちは良くわかんないなー」

「お前が脳天気なだけだよ!」

エリーが抗議の声を上げるがルルは特に気にしない。

「でもエリーさんのそのエリマキ、とってもかわいいですよ?」

「え?こ、これが?」

そう言いながらエリマキを自慢げになぶる。

「ま、まあこれは私だけの個性だからなあ♪他のけものには無い私だけのものだからなあ♪」

エリーはとてもご満悦な様子だった。それを見て、  
「うん！とつても羨ましいよ！」

サーバルも便乗する。

「そうかそうかく羨ましいか〜かわいいか〜」

「だから友達になってよ！」

「勿論良いよ〜」

サーバルの急な提案にふつつうに乗つかるエリー。この場にいる全員が「チョロイな・・・」と思ったのは言うまでもない。

「・・・は待て待て！何でこの私がお前らなんかとー！やんのかコラー！」

「あははは、やんないよこらー！また遊ぼうね♪」

「おー、いつでも来いやコラー！」

手を振るサーバルに手を振り返しつつ声を上げるエリー。

「案外、素直なんだな」

そう漏らしながら、先行するサーバルにツチノコは着いて行った。

「レアキャラとーじよー！オカピだゾつと♪」

次に会ったのは、キリンでもシマウマでもない中途半端なけものオカピだ。

「オカピは、世界三大珍獣の一頭で、そのシマシマで綺麗な脚が人気なんだ。「森の貴婦人」とも呼ばれているよ」

「森の貴婦人？さっすが私だよねえ」

自信満々な表情で脚のシマシマ模様を強調する。

「うー、悔しいけどそれ綺麗だね・・・その点は認めざるを得ないよ」  
サーバルが悔しげに呻く。

「待って待って！脚の綺麗さならあたしだって負けないよ！」

そんなオカピに突っかかるのはルルだ。

「この綺麗な色！トムソングゼルのも全部だよ！」

「お前は脚の綺麗さが全部ってけものとしてそれでいいのか」

ツチノコがツツコミを入れるがルルもオカピも取り合わなかった。  
「シロクロシマシマ模様の方が綺麗に決まってるよ!」

オカピはそんなルルの反論を認めない。

「シロクロシマシマだったらシマウマもそうなんだが・・・」

ツチノコの呟きはやはり無視される。

「だったら決めてもらおうよ! かばんに!」

「ええっ! ぼ、ぼくですか!?!」

二人の論争をただただ傍観してたかばんちゃんはいきなりの指名に仰天する。

「ねえ! かばんはあたしとオカピの脚、どっちが綺麗だと思う!?!」

「私だよね!?! かばん!」

「え、えーつと・・・」

二人に詰め寄られて思いつきり困るかばんちゃん。

「正直に言っつてよ!?! 怒らないから!」

「さあ! どっち!」

「そ、そんなこと言われても・・・」

かばんちゃんは困り果ててサーバルにアイコンタクトで助けを求め、

「・・・♪」

当のサーバルは全く意図を読めてない様子で目が合ったかばんちゃんに向けてピースサインを送っている。

(ずっと一緒に居るけど、噛み合わないなあ)

なんてことを考えながら、今も尚詰め寄ってくる二人に向き合う。

「正直に、言います・・・ぼくは・・・」

かばんちゃんの声に二人は生唾を飲む。

「・・・サーバルちゃんの尻尾です」

「・・・えっ?」

「え、わたし!?!」

「はあ!?!」

かばんちゃんの予想外の答えに一同は唾然とする。

「サーバルちゃんの尻尾はしなやかモフモフしてて綺麗で、ホント大

好きなんです！」

「ちよつとかぼん！あたしとオカピの事なのになんでサーバルなの  
！」

「そうだよ!!なんで！」

「いや、正直に言えって言ってましたから・・・」

「かぼんちゃん、そんなにわたしの尻尾好きだったの!?!だったらいくらでも触らせてあげるよ?」

「ありがとうサーバルちゃん！」

そういうとかぼんちゃんはサーバルの尻尾をモフモフし始めた。

「えー・・・」

そんな様子に呆気にとられるルルとオカピ。

「かぼんは急におかしくなるな。そんなところもミライそつくりだ」

## 第七話 ツチノコとじゃんぐる 後編

ツチノコ達一行は、茶色く濁った大きな河に出てきた。

「えっと、この何処かにカワウソさんが居るはずですが・・・」

そう言いながら河を見渡すかばんちゃん。

「あ、あつたよかばんちゃん！」

コツメカワウソが滑り台にしている橋の残骸をいち早く見つけたサーバル。

「でも、コツメは居ないみたいだな」

残骸をよく観察したが、コツメカワウソの姿は見えなかった。

「何処かに遊びに行っちゃったのかな？」

「だとしたらどうしよう・・・カワウソさんが行くような場所なんて色々あり過ぎて思い付かないよ・・・」

「またプレーリーと一緒にゆうえんちに行ったりしたらどうしよう」

サーバルとかばんちゃんが話し合う。

「流石に「遊びの天才」なんて呼ばれてないもんね」

ルルことトムソングゼルが川岸の石で水切りをしながら応える。

「わー何それ！何やってるの？」

「水切りって知らない？石を綺麗に投げると水の中に入らずにピョンピョンと水面を飛び跳ねてくんだよ」

「すっごーい！わたしもやりたいわ！わたしもやりたい！」

サーバルも手近な石を拾って思いつきり河に投げ込むが盛大な水飛沫を立てて、川底に沈んでいった。

「あれー？どうしてー？」

「これ、結構難しくてね、投げ方にコツがいるんだよね」

そう言いながらルルは平ぺったい石を水面と水平になるように投げた。すると一回だけ跳ねて、また河へ沈んだ。

「あたしもまだ一回だけしか出来たこと無いんだよねー」

「一回だけでも出来るなんて凄いよ！」

「そうかなあ？ありがとう」

「ちよつとぼくもやってみたいです」

「私もやったことあるなそれ」

サーバルとルルの楽しそうな姿にかばんちゃんとツチノコも興味を持ってきた。

「コツとかあるんですか?」

「腰を落として、石に回転をかけて、水面と水平になるように投げる感じかな」

「私が見本を見せてやるよ」

自信満々な様子のツチノコが少し平べったい石を拾うと、綺麗なフォームで水面に投げつけた。が、

「あれ?」

ツチノコがマヌケな声をあげた。

ツチノコが投げた石は一回も跳ねることもなく河底へ吸い込まれていった。

「嘘だろ!こんなことあるか!」

「へーきへーき!フレンズによつて得意なこと違うから!」

「これ一応得意なことなんだが・・・」

唯一無二の励ましの言葉が煽りになった瞬間である。

「じゃあぼくも挑戦してみますね」

かばんちゃんは平べったく、少し凹んでる石を見つけて、寸分の狂いも無く水面へ、綺麗に回転をかけ投げつけた。

「わああ!!」

「すつつごおおい!!!」

「うなっ!マジかよ!!!」

かばんちゃんが投げた石は水面を沈むことなく飛び跳ね、向こう岸の陸に着陸した。

「わ!すごい!楽しいですね!これ」

「すごいよかばん!コツを教えて!」

「わたしもわたしも!教えてー!」

「え、そんな急に来られても・・・」

「かばん・・・お前は一生もののライバルだ・・・!」



「ちよつといいか？」

そんな水切りで盛り上がってる一行に声が掛かった。

「ん？あれ？あなたは誰？なんのフレンズ？」

「オレはブラックジャガー。ここで船頭をしているジャガーの姉だ」

ブラックジャガーと名乗ったそのけものは、真っ黒な髪からまた暗い灰色の目を覗かせながらサーバル達に詰め寄る。

「ジャガーのお姉ちゃん!? ジャガーって姉妹いたんだ!」

ルルはのんきにそんなこと言ってるが、かばんちゃんはブラックジャガーが醸し出す異様な雰囲気圧倒されている。

「ブラックジャガーか。その武人的な近寄り難い雰囲気は健在なんだな」

ツチノコが誰にも聞こえないような小声でひっそり呟く。

「それで、ブラックジャガーはわたしたちに何か用なの？」

ブラックジャガーの雰囲気物怖じしず（感じてないだけかも）、サーバルはブラックジャガー聞き返す。

「ああ、お前ら、ジャガーは見なかったか？」

「じゃ、ジャガーさんになにか用なんですか・・・？」

かばんちゃんが恐る恐る尋ねる。

「ああ、あいつに分からせてやりたい事があるんだ」

その一言にツチノコはサーバル、ルル、かばんちゃんを連れ、ブラックジャガーの耳に入らない距離まで離れてこういった。

「いいかお前ら。ブラックジャガーはジャガーを引き連れて一緒に修行させる気だ。船頭とかそんなことお構いなしにな」

「ええ、それはダメだよ! ジャガーが居ないとここを渡れない子がたくさん出てきちゃうよ!」

「ぼくの橋も、ジャンプが苦手なフレンズさんには危ないですしね」

「それにジャガーも、話したことあるけど、修行とか、そういうのには無縁そうな性格してるもんね」

「幸い、まだジャガーは居ない。だからジャガーが来る前になんとかしてブラックジャガーを追い返そう」

「うん」

「分かった」

「はい」

三人の返事に首を縦に降って返したツチノコ。そして視線をブラックジャガーに移す。すると

「おーい！かばん！みんなー！」

「久しぶりだねー!!」

「「「ってバカタレー!!」」」

カワウソを載せたジャガーがのんきに河の向こうからこちらへ向かってきていた。

当然、ジャガーの声にブラックジャガーも気が付いた。

「ほう、来たな。ジャガーー！」

「あ、姉さん！」

ツチノコ達の策も虚しくあつさりジャガーとブラックジャガーは対面した。

「まだそんなことしてたのか」

「いいだろ別に。これが今のあたしの仕事さ」

かばんちゃん達がいる河辺に船を付け、カワウソを下ろしつつ、ブラックジャガーに応えるジャガー。

「ひやつほー！みんな久しぶりー！」

ハイテンションにカワウソが四人に挨拶するが、四人はジャガー達のことので気が気で無かった。

「んで、今日はなんの用さ。例の事ならあたしはお断りだよ」

「ふん。お前に断るといふ権利はない。早くこっちにくるんだ」

「や、やめてください！」

ブラックジャガーの言動に聞きかねたかばんちゃんがブラックジャガーとジャガーの間に立ち塞がった。

「ん？なんだお前は。オレら姉妹の邪魔をするな」

「ちよ、かばん！何してんの!?!」

「ジャガーさんに何かするなんて、このぼくが許しませんよ！」

「ふん、部外者が。邪魔をするなど言っただろう。二度はないぞ」

「部外者の前に、ジャガーさんはぼくの友達ですから・・・！」

「あくまで邪魔をするか」

そういうとブラックジャガーは暗い灰色の瞳と爪を光らせた。

「ちよ、おい！」

「かばんちゃん！」

それを見かねたツチノコとサーバルもかばんちゃんのとこへ駆け寄り、ブラックジャガーと対峙した。

「いくらなんでも、かばんに手を出すのは許さないよ！」

ジャガーも元々綺麗な虹彩の瞳と自慢の爪を光らせた。

「あれ？なにこの険悪な雰囲気」

「コツメツちはちよつとここに居て！」

ルルがコツメカワウソを抑える。

「オレの一撃、受けきれるか！『ブラックヒットスラッグ』!!」

「一発でダメなら何発も撃ち込む！『ジャガーヒットスラッグ』!!」

そういうと二人のジャガーは飛びかかって行った。

かばんちゃん達にひつそりと近づく中型のセルリアンに。

「へ？」

ブラックジャガーの動きをずっと追いかけたツチノコはいち早く、標的の違いに気が付いた。

ブラックジャガーが相手をした中型のセルリアンは、一撃で石を砕かれ消滅し、ジャガーの方も、目に見止まらぬ速さの爪に成す術もなく粉々にされていた。

「な、なんだ、かばんちゃん狙いじゃ、無かったんだ……」

サーバルが心底安心したように言葉を漏らす。

「あたしも姉さんも野生解放したのは始めからセルリアン狙いだよ」

「当然だ。オレの力はフレンズに振るう物ではない」

「そ、そうなんですか、良かった……」

かばんちゃんも胸をなで下ろす。

「それでジャガーよ。どうしてもPPPPライブには来ないというか？」

「うん。あたしはそういうのはちよつと苦手なんだ」

「へ？PPPP?」

「またもツチノコがマヌケな声をあげる。」

「ああ、姉さんさ、ライブに定期的に行くほどのPPPFアンなんだよ。あたしも何回か誘われてるけど、船頭の仕事もあるし、ああいう空気がちよつと苦手です断ってるんだけど、聞かないんだよ」

「なんの関係もないじゃんツチノコ！」

「うるさい！私だってブラックジャガーがあんなになってるなんて知らなかったんだよ！」

「珍しくサーバルとツチノコが口論を始める。」

「まあ今日までしつこく勧めて来たが、もう諦めるとするよ。にしてもお前は相変わらずだな。船頭の仕事を始めても、その腕は健在か」  
「それはごつちのセリフだよ。PPPFアンになっただとしても相変わらずの腕だね」

「ジャガー姉妹はお互いの腕を認め合い、ブラックジャガー颯爽と去っていった。」

「いやー、これで一件落着かな?」

「すっかり影が薄くなったルルが纏めた。」

「あ、そうだ。そんで君らはあたしらになんか用?」

「ジャガーがツチノコ達に改めて向き合う。」

「あ、そうだ。カバから聞いたんだが、お前とコツメがなにか不思議なものを見つけたって聞いたんだ」

「ああ、ジャガー、あれじゃない?」

「そうだな。これか?」

「ジャガーは渡しに使ってる船からキラキラと輝く何かを取り出した。」

「これ、何か分かるか?キラキラ光ってて、何かあたしらを惹き付ける妙な魅力的な力を感じるんだが」

「わたしも気になるんだー」

「コツメカワウソもジャガーの言葉に同意する。」

「ふむ、これはキラキラだな」

「キラキラ?」

その場の全員の声が重なる。

「キラキラつてのはトワ、あー、園長にけもの達が着いていくつてときに、お礼として渡してたものだな。これがあると今まで以上の力を出せるんだ」

「へえ、そんなのがあつたんだね」

「どれくらい力が湧くんだろう。気になるねー」

「あたしそれ欲しいなー」

「いや、わたしが持てば更にかばんちゃんを守れるよ!」

「み、皆さんそのへんで・・・」

困惑しつつかばんちゃんが収めようとしたとき、また新たな声がかかった。

「あ、あの、それ・・・なに・・・?」

「ん?なあに?」

かなり控えめな声を耳ざとく拾ったのはサーバル。見ると、オレンジ色のフリルが付いたスクール水着、身も蓋もない言い方をすればコツメカワウソのオレンジ色の服を着用し、光の失われた瞳でこちらを見つめてくる少女がいた。

「あれ?あなたは?」

「わ、わたし・・・ニホンカワウソ・・・。ずっと、ひとりぼっちだったの・・・」

「へえ、あなたもカワウソなんだあ」

ニホンカワウソの言葉を聞いて反応したのは他ならぬコツメカワウソだ。

「わたし、コツメカワウソ!種としてはちよつと違うけど、同じカワウソだよ!」

「コツメカワウソ、ちゃん・・・」

「うん!もうカワウソ仲間が居るんだからひとりぼっちじゃないね!」

「・・・やつと、仲間に出会えた・・・良かった・・・嬉しい・・・!」

「じゃあ早速アレやろう!ジャグリング!楽しいよ!行こう行こう!!」

「あ、いや、さっきのキラキラ・・・」

コツメカワウソはニホンカワウソの小さな抗議に聞く耳を持たず、突っ走って行った。

「まああんな控えめな奴にはコツメの様な明るいのがお似合いだな」  
そんな様子を見ながらツチノコが呟いた。

## 第八話 ツチノコとこうざん

「さて、次はどこ行くんだ？」

ジャングル探検が終わった一行は次の目的地へ向かっていた。

「次は高山にあるアルパカさんのカフェですね」

「カフェかー！また紅茶飲みたいなー！」

サーバルがワクワクしながら山の上のカフェに思いを馳せ。

「カフェか。高山支店と言った所か。アルパカってスリか？それともワカイヤか？」

「ああ、スリの方だよ」

ツチノコの疑問に思うルルが答える。

「ふーん。あいつがカフェをするなんて時代は変わったもんだな」

「ツチノコさんの時代のアルパカさんはどんな事をしてらしたんですか？」

そんなツチノコのひとりごとにかばんちゃんが高山への道を進みながら聞く。

「スリか？あいつは床屋、所謂髪の毛を切る仕事をしていたな」

「そうなんだ！わたしも今度切ってもらおうかな」

サーバルが既に見え始めてる高山の頂上を見ながらつぶやく。

「あくまで私の時代のアルパカだからな？今のアルパカは知らんぞ？」

「それにサーバルちゃんはまだ短いし・・・」

「でも確かにアルパカって髪長いもんね。定期的に切らないと前髪伸びすぎて両目隠れになっちゃったりして！」

ルルが面白いこと思いついたような感じに笑いながら言う。

「でももしそうなら大変ですよね。前が見えないし」

「アルパカ・スリは無尽蔵に毛が伸びるから定期的に切らないと最悪毛の塊みたいになってしまうんだ」

かばんちゃんの言葉を聞き、ラッキービーストがつかさず解説する。

「そうなんですか。ならなんらかの方法で切ってるんですかね」

「どうなんだろうね。さて、山に着いたよ」

改めて山麓から山を見上げる一同。

「さて、どうやって登ろうか」

「前はトキさんに運んでもらいましたが、今はいませんね」

「この位なら普通に登れそうだがな」

「ぼくも、行けるかな・・・？」

「えー？でも大変だよー？」

「ぼくは無理そうです」

各々が思い思いに駄弁ついていると

「どうやらここは私の出番のようね」

そんな声が空から降ってきた。

「ん？あ、トキさん！」

破滅的な歌声を持つ鳥、トキが現れた。

「お困りの様子ね。アルパカのカフェに行くの？」

「そうなんです。またお願いできますか？」

「うふふ、私ね、アルパカのカフェに行きたい子を連れてってあげるボ

ランティアを始めたの。お安い御用よ」

「そうなんですか！ありがとうございます！」

「ちよつとちよつと、私も居るんですけど！」

かばんちゃんとトキのお話に赤い影が割り込んできた。

「あれ？君は確かシヨウジョウトキだっけ？ゆうえんちでPPPと歌ってたよね？」

「そうですそうです！久しぶりですねサーバル」

赤い影の招待はトキの仲間のシヨウジョウトキだ。

「シヨウジョウトキの朱色は、餌である甲殻類の色素の影響なんだ。だから生まれたてのシヨウジョウトキは朱色はしてないんだ」

またラツキービーストの解説が入る。

「私とシヨウジョウトキの二人体制でやってるの。さて、かばん以外にもう一人運べるわよ。誰にする？」

「私は大丈夫だ。むしろ登れるか試してみたい。」

「じゃあじゃあツチノコ！ぼくとどつちが先に着くか競争しようよ



！」

「お、いい度胸だな。言つとくが負けるつもりは無いぞ?」

「もちろん!本気で来てよね!」

ルルとツチノコが闘志を燃やす。

「あ、じゃあショウジョウトキ、わたしお願い出来るかな?もう山登りは懲り懲りだよ」

「おまかせあれ!私ならトキよりも早くカフェに着きますよ!

「へえそう。だったら私も負けられないわね」

「どっちが先に着くか競争ですよ!トキ!」

「負けないわよ!ショウジョウトキ!」

ここでも二人が闘志を燃やす。

「えつと、危険なのであまり飛ばさないでくださいね・・・?」

「安全面に関しては安心してくれていいわよ」

「私たちなら大丈夫ですよ!」

自慢げなトキ二人だが、

「ふ、不安だなあ・・・」

「大丈夫かなあ」

かぼんちゃんとサーバルは不安そうに声を漏らす。

「じゃあ早速始めるよ!よいドン!!」

「あ、おい!イキナリは卑怯だぞ!」

ルルが言いながら岸壁に張り付き、器用に崖の石を登っていき、出遅れたツチノコが出っ張った岩を足場に飛んでいった。

「じゃあ私たちも行くわよ」

「負けませんよ!」

「かぼんちゃん、大丈夫かなあ?」

「落とされないことを祈ろう」

「心配しないでいいわよ」

く山登り組

「よっ、ほっ、それっ!」

ルルが器用に小さな出っ張りも目ざとく見つけ、足場にし登ってい

く。

「よつと」

その横でツチノコが小さな出っ張りも大きな岩場もお構い無しに足場にし、ジャンプして登る。

「いやー、ツチノコ早いなー」

「お前も、中々やるじゃないか。大丈夫そうか？」

「へーきへーき！すぐ追いつくよ！」

「ふん、無理はすんなよ」

「そつちこそ、急に落ちてきたって受け止めれないからね」

「他人の心配より自分の心配をしたらど」

ツチノコが小言を言ってる真つ最中にそれは起きた。ツチノコが足をかけていた石が突如砕けた。

「うおっ！」

ほぼ垂直な崖で急にバランスを崩したツチノコはそのまま崖下へ真つ逆さまに・・・

「ツチノコー!!」

ルルが慌ててツチノコに声を掛けるが、ツチノコは無残にルルの隣を通って落ちていく・・・所だった。

「えいっ!!」

ルルが決死の覚悟で落ちていくツチノコにジャンプし飛び付いた。

「ば、馬鹿お前飛びついてどうすんだよ！さらに勢いについてお前諸共落ちるだけだぞ!!!」

「あああああ!!どうしよう助けてツチノコー!!」

ルルは後先を全く考えなかった行動に一瞬で後悔し、涙目でツチノコに助けを求める。

「つたく、それっ!!」

ツチノコは近くにあった小さな出っ張りに尻尾を伸ばし掴まらせ再び崖にくつつくことに成功した。

「はあ、危なかった・・・一大事だったな」

「うわーんツチノコー!!怖かったよおおお!!!」

ルルの涙目が大泣きが変わった。

「ん・・・まあ私が落ちちまったとき、つかさず捕まえてくれてありがとな。受け止めれたじゃないか。落ちただけだが」

「うう・・・ぐすっ・・・」

ルルはツチノコの言葉を聞いてるのか聞いてないのか、ひたすらおえつを漏らしていた。

「なあ、ルル。もう競争は止めるか。慎重にいこう」

「う、うん。そうする・・・」

この出来事でルルには筆舌に尽くし難いトラウマを背負うことになった。

## 第九話 ツチノコとカフエ

ツチノコとルルがピンチを切り抜けた頃、トキ達は優雅な空の旅をしていた、はずもなく。

「私の方が絶対速いんですけど!!」

「それはどうかしら。私も負けるつもりはないわ」

二人のトキが競い合っているため、サーバルとかぼんが居るのもお構いなく猛スピードで空の彼方へ向かって行っていた。

「・・・!!!」

かぼんはトキの猛スピードに抵抗できる訳もなく、風を顔面に浴びながらなんとか呼吸だけはしようと必死にもがいている。

「・・・」

サーバルは完全にその身をショウジョウトキに任せ、四肢を振り落としだらんと脱力していた。かぼんが「生きてるのかな・・・？」と心配になるほどに。

かぼんはこの地獄の様な時間が早く終わるのをこころからずっと願っていた。その願いが叶ったのか、

「そろそろ休憩するわよ」

とトキがいつかの柱に着地した。ショウジョウトキもトキに続く。

「どう？かぼん。空の旅、楽しんでる？」

そんなことを聞いてくるトキにかぼんは呼吸を整えつつ、じつとトキの顔を眺めることしか出来なかった。

そしてトキは、

「楽しんでくれてるみたいね。呼吸が疎かになるほどはしゃいじゃって」

と腹立つようなことを言ってくる。

かぼんは呼吸もさせない程はしゃいでたのはどっちだという反論を胸にしまい、ぐったりと横たわるサーバルに駆け寄る。

「サーバルちゃん・・・へ、平気・・・？」

「う、うみやあ、うう・・・」

どうやら平気ではないようだ。

「あれ？サーバル。元気ないんですか？」

そこへ元凶が声をかけてくる。

「元気ないのなら元気が漲る歌をお届けしますよ！」

「私と一緒にね」

トキとシヨウジヨウトキが並んでサーバルの前に立った。が、

「いやいや大丈夫大丈夫へーいへーきもう良くなったもう良くなったから止めて!!」

本能的に生命の危機を感じたサーバルは飛び起きて捲し立てた。

「そう？元気ならもう出発するわね」

「え」

二人が抗議する間も無くサーバルらを連れトキとシヨウジヨウトキはまた空の彼方へ消えていった。

さあ地獄の時間の再開だ。

所変わってジャパリカフェ。

カフェを一人で切盛りするアルパカ・スリが庭の草むしりをしてた。かばんが初めてカフェに来た時に作ってくれたカフェマーク。際限なく伸びてくる雑草に消されないように毎日せっせと草むしりをしている。

そんな中、

「んう？」

二つの影が高山山頂へ来たのをアルパカは見つけた。

「なにになにくおきやくさんかなあ!？」

アルパカは草むしりの手を止め、這い上がろうとする二つの影に手を差し伸べた。

「だいいじよぶ？」

影の一つ、ツチノコがアルパカの手をしっかりと握る。アルパカもしっかり握られた事を確認すると思いつき引き張る。

するとツチノコのもう一方の手にしがみつくルルの姿が見えた。

「あらーおきやくさんふったりも！いらっしやあい！ようこそ、ジャパリカフェへえ」

アルパカのその言葉にツチノコは思いっきり困惑した顔をアルパカに向けた。が、アルパカは特に気にせず

「えっと、そっちの子は・・・」

ルルの姿を見、記憶のそこから名前を引つ張りだそうとする。

「あ、ぼくはトムソンガゼル！ルルって呼んでくれればいいよ！」

「あたしはアルパカ・スリだよお。よろしくねえルル」

そしてアルパカはツチノコに視線を向ける。

「あなたはツチノコだにえ！黒セルリアン戦の時はお世話になったよお」

「あ、ああ」

ツチノコはアルパカのそんな言葉に曖昧に返事しか出来なかった。

「・・・幾ら代替わりしたとしても、ここまで変わるものなのか・・・？」

「んう？なあに？」

ツチノコの言わんとすることがイマイチ理解出来ずにアルパカは聞き返す。

「ああ、悪い。今説明してやるよ」

ツチノコがアルパカにツチノコの身の上の事情を説明する。

「うーん、なんだかよくわがないねえ・・・」

「まあ今の私はお前の知ってるツチノコとはちよつと違うってことだよ」

ツチノコが思いっきり噛み砕いて説明する。

「ねえツチノコ。昔のアルパカってどんな感じだったの？」

「スリか。スリはな、もつとこう・・・中性的な話し方で、麓でも言ったが髪の毛のセットが得意だった」

「中性的な話し方って、「やあ、ぎげんよう。今日はどんな髪型にする？ま、ぼくに任せてよ」的な感じ？」

ルルが無理矢理声を作ってツチノコに聞く。

「ああ、そんな感じ」

「へ、へえ〜」

ルルは完全に目を泳がせながらツチノコとアルパカを交互に見

やった。

「今のあたしとは欠片もあつてないねえ」

アルパカが困ったように自虐的に笑う。

「ま、まあ、仰天したが、今のお前はそれでいいんじゃないやねえか？」

「それより、ここって紅茶飲めるんでしょ！ぼく飲んでみたかったんだ！」

ルルが話題を変えアルパカに飛びつく。

「いいよいいよお！じゃんじゃんのんでいってにえ!!」

アルパカもそんなルルを迎え入れる。

「ツチノコも飲みにおいでよお！」

ぼーっと二人の様子を眺めてたツチノコにアルパカが声をかける。

「ああ、今行く」

そう言いながらもカフェに入っていく二人を尚も眺めるツチノコ。

「このカフェをやっていたであろうボブキャットやリオ、アンジーは今どこで何をやってるんだろうか・・・」

「まあ彼女らもきつとどこかで新たな試みを始めてるのだろうな。一抹の寂しさも感じるが」

「やっぱりここは何もかも変わってしまったジャパリパークなんだな・・・」

ツチノコー！まだー!?というルルの大声に改めてああと返事をする。

「そろそろ待たせるのも悪いか。山登りの疲れは紅茶で取ろう」

ツチノコが歩き出したと同時に空に二つの影が舞い上がった。

「ん?」

ツチノコが気づき見上げると同時に、その二つの影はツチノコに覆い被さるように突撃殺到してきた。

「のわあー!」

咄嗟にジャンプし、避けようとしたがその影は思いつきりツチノコを捉えた。

「この勝負、私の勝ちですね!」

「いや、同着じゃないかしら?」

「・・・」

ツチノコは倒れ、埋もれながらその声を確り聞いた。  
聞いたところで特に何も無いが。

「いやー・・・酷い目に合ったよ・・・」

紅茶をすすりながらサーバルが疲れたようにため息をつく。

「うん・・・きつかった・・・」

かばんも紅茶を飲みながらぐったりとしている。

「ごめんなさい。つい熱くなっちゃって・・・」

「私からも謝ります!」

トキとシヨウジヨウトキは申し訳なきように頭を深々と垂れて謝る。

「この山、崖登るのも連れてって貰うのもキツイなんて酷いよ・・・」

「まあまあ、その分あたしのカフェでゆっくりしていつてねえ」

優しく癒しの笑顔でサーバルを慰めるアルパカ。

「じゃあみんなの元気が溢れるように、私がここで一曲・・・」

サーバル「!」

かばん「♪」

ルル「!」

ツチノコ「!?!」

トキの発言に四人・・・特にツチノコは異様な反応を示し、何が起こってもいいように身構えた。

が、

「わたしはあ、とおきい!なかあまあをさがしてる!!」

お世辞にも上手とは言えないが、幾分か、いやかなり上達したトキの歌が響いてきた。

「すごいね!かなり上手になったんじゃない?」

「うふふ、毎日アルパカのお茶を飲んで練習した成果よ」

「私だってそれ位は出来るんですけど!」

「お、お前は本当にトキか?あのトキなのか・・・?あの破滅的な歌声の持ち主だった奴なのか・・・?」



「ひどい言われようね」

「あの歌うだけで天は裂け、地は割れ、水は踊り、山は崩れ、全世界に混乱と破滅をもたらすあのトキなのか・・・？」

「・・・それは流石に言い過ぎじゃないの」

「トキは神かなんかですか」

ちよつと傷ついたようにトキの眉毛が下がる。

そしてシヨウジョウトキも思わずツツコミを入れる。

「いや、代替わりした影響がここまで強かったとは思わなかったただけだ。さて、サーバルにかばん。カフェの次はどこに行くんだ？」

「えつと、次はさばくだったつけ？かばんちゃん」

「うん。丁度そこにはツチノコさんが調査してた遺跡もあったはずだね」

「遺跡か。そこに行けばこのジャパリパークについて色々分かるかもな。よし、次は探検だな！」

「じゃあみんな頑張つてねえ」

「最後に応援歌を一曲・・・」

「私も一緒に歌うんですけど！」

「そういえばスリ。ここどこか降りる場所とかないか？」

「ああ、今案内するよお」

ツチノコはトキ達が歌い始める前にアルパカに場所を聞き、サーバルらを連れ逃げるように向かつて行った。

その道中

「あれは・・・」

ツチノコはサンドスターが噴出する山を呆然と眺めていた。

「サンドスターの山がどうかしたんですか？」

「あそこには今もアイツが眠っているのか・・・いつか絶対助けてやるぞ！」

「ツチノコさん？どうしたんですか？」

妙に意気込むツチノコを見て不穩げにかばんがツチノコに尋ねる。

「いや、昔の私の友達の話だ。気にしないでくれ。それよりロープウェイの準備は出来たか？二人一組で降りてくぞ？」

「うん！バッチリ出来たよ！行こうツチノコ！」

ルルのがツチノコの手を引きツチノコは素直にそれに従う。

「さて、砂漠には一体何が待ってるんだろうな。楽しみだぜ」

ツチノコのその吹きはサーバルとルルの「おーいしよ」という掛け声にかき消され、誰の耳に入ることは無かった。

## 第十話 ツチノコとさばく

「さてさて、さばくへ行くのはいいんだけど、歩いて踏破するのは厳しいんじゃないかな？」

こうさんの麓へ降りた一同。次の目的地であるさばくへ向かうための話し合いをしていた。その最中、ルルの発言だ。

「やっぱりバスが無いと。あの暑い中歩くのはわたし溶けちゃうよ」

サーバルもルルの意見に同意する。

「でもバスは船に改造しちゃいましたしね・・・」

かつてかばんとサーバルとラッキービーストがパーク中を走り回った思い出のジャパリバスは、かばんの新たな船出の為、船へと姿を変えた。

一度は船出をしたかばんとラッキービースト、そしてサーバル達だったが、電池切れという最後の最後でラッキービーストのむの…残念な部分が発揮される。

その後は充電の為、またあの島へと引き返した。

かばんは、あの時のことは永遠に忘れることは出来ないだろうと思う。今でも鮮明に思い出せるあの光景・・・

かばんとラッキービースト、そして着いて行つたサーバルとアラフェネがまたヒノデ港へ帰って来た時、まだそこに残ってたフレンズ達は思い思いの反応を見せた。

「わあ!!かばん達が帰ってきたあ!!」

と、喜ぶものや、

「え、も、もう来たの?」

と、戸惑うもの、

「もう帰ってきたのですか・・・」

と、呆れ気味にいうもの。

ただ皆、喜んでいたという点だけは一緒だった。

「もう帰ってきたのですか。随分短い旅立ちですね」

と、コノハ博士が帰ってきたかばんに笑みを浮かべながら話しかけ

る。しかし、

「ええ、すみませんね。でも、またすぐ出発しますよ」

というかばんの一言に場の空気が凍りついた。

「バスの電池が無くなったので充電しに来たんです。終わり次第、また出発します。出鼻挫いちゃいましたね」

とかばんは自虐的に笑うが、島に残っていたフレンズ達からはまばらまばらに複雑な笑みが漏れるだけだった。

そしてその空気に気付かないほど、かばんも鈍感ではない。

「えっと、皆さんどうしたんですか・・・？」

「な、なんでも無いのです！」

強がるようにコノハが声を上げる。

でもみんながみんな、コノハの様に強がれるかと言えばそうではなく、

「お願いかばん!!もうどこにも行かないで!」

と、コツメカワウソがかばんの胸へ泣きついてきた。いつも明るく、楽しみを見つける天才が、だ。その顔には楽しさなんてなく、ただただ、かばんを失いたくないと願う気持ちが涙となって濡らしていた。

「その子ね、君が旅立ったあと崩れ落ちるように泣いちゃったんだ。よっぽど別れが辛かったんだらうね」

ジャガーが泣きつくカワウソを見ながら、かばんに事情を説明する。

「二回目はなんとか涙を堪えて、君に心配させないように見送りが出来たけど、こんな姿を見せちゃった以上、もう出来そうにないね」

かばんはカワウソを胸に抱きながらジャガーの言葉を聴いていた。

「そしてそう思ってるのはカワウソだけじゃないよ。みんなもそうだ」

そう言いながらジャガーは後ろへ手を向けた。そこには喜びムードから一転、暗く悲しい空気が場を支配していた。かばんに向けられる表情はどれも眉が釣り下がり、辛そうな顔をしていた。

そしてカワウソをきっかけに決壊をしまい、顔を涙で濡らしな

がらもう行かないでと、真摯に訴えかける面々。かばんは気圧された様に固まってしまっていた。

「みんな、別れが悲しくて辛かったんだよ。他ならぬ、あだしも……」  
そんなジャガーも決壊し涙を目に浮かべながら言う。

「もう君とは別れたくないんだ……ずっとここに……」

遂にはジャガーも言葉を紡げなくなってしまった。

「我々も……限界なのです……」

果てにはコノハとミミちゃんもその大きな瞳を濡らしていた。

「別れというのは、こんなに辛いものだったのですね。博士……」

「お願いなのです……かばん……」

コノハは大粒の雫を零しながら真っ直ぐかばんを見据えて、苦しそうに言った。

「これ以上、もう我々に辛い体験をさせないで下さい!!」

こんなことがあって、また海へ行くほど、かばんは薄情者では無かった。行けるわけなかった。

(ホントにぼくは、この島でみんなと出会って幸せ者だなあ)

と、改めて話し合いをしている面々を見ながら思っていた。

「船にしたジャパリバスはまだヒノデ港にあるから使えないよね」

サーバルが困ったように言う。

「ラッキービーストに聞けば、他のジャパリバスの場所がわかるんじゃないか?」

「あ、なら早速聞いてみますね」

ぼんやりと思い出に浸っていたかばんはツチノコの言葉で引き戻され、早速ツチノコ案を採用する。

「ジャパリバスはロープウェイ乗り場に一台ある筈だよ」

ラッキービーストに聞くとそんな答えが返ってきた。

「ロープウェイ乗り場ってちょうどこの辺りだな、あれじゃないか?」

と目ざとくツチノコが指す。その先には確かにジャパリバスが鎮座してた。

「おお、ナイスツチノコ！」

ルルが飛び跳ねながらジャパリバスに近づいていき、「待ってー！」とサーバルも続く。

「これがあればさばくちほーも幾分かマシになりますね」

かばんが安心したように一息ついて、バスのフロントに触れる。が、

「まさかこれも電池切れとか無いですよね・・・？」

そう呟いたかばんの声に被せるように、ラッキービーストが言った。

「電池がなくなってるみたいだね」

「やつと動くか・・・」

ツチノコが疲れたように、ガタガタと揺れ動くバスに体を預けてぐったりとしていた。バスの充電のため、またこうざんへ登っていったからだ。

無論、押し付けられたとかではなく、「タイムアタックを試してみたい」という一瞬で後悔するような事を言ってしまったからだ。

それにしてもミスったな、とツチノコは思う。

こうざんへ改めて登る時にかばんが「嫌ならぼくがいきますよ？」という助け舟を出してくれた。

それなのにツチノコは「それはありがたいが、ホントは自分で行きたいが、お前らがどうしてもって言うから仕方なくお前らに譲るという形で辞退したい」なんて言ってしまった。

それをルルとサーバルは理解出来ずに「じゃあ行きたいならツチノコが行きなよ！」と言われたらそれまでだった。かばんに助けを求めようとアイコンタクトを送っても、かばんは困ったように笑みを作るだけだった。

結局ツチノコが行き、また滑落しそうになりかけ、ルルにも負けず劣らずなトラウマを抱えることとなった。

ツチノコは改めて車内を見回す。

ルルが落ち着きなくあちらこちらへ行き、窓から外の景色を眺めて

は目を輝かせていた。

かばんは運転席にてハンドルを握っていた。動かしてる訳じゃない、ラツキービーストの自動運転だが、なんとなく握っていたいののはヒトの性か。

サーバルはジャパリバスの助手席に座り、かばんとお喋りをしていく。ハンドルを握っているかばんが新鮮なのだろうか。ルルに負けないほどに目を輝かせていた。

ツチノコはぼんやりとその風景を眺めていたが、やがて瞼が重たくなってきた。バスの心地よい揺れと、山登りでの心身共の疲れだろうか。

起きたらもう目的地に着いてるかな、なんて考えながらツチノコは目を閉じ、深い眠りについた。

## 第十一話 ツチノコとさばく 中編

「……ん?」

バスの助手席に居たサーバルは、目の前に迫る真っ黒で大きな影を見つけた。

「……あ」

かばんもその影を認めた。

「ラッキーさん、あれって……」

「うん。砂嵐だね。前と同じように迂回しよう」

「砂嵐かあ。やっぱり砂漠には多いね」

「なにになに!!なにがあったの!!」

テンション高めに、ルルが運転席に飛び出してくる。

「ああ、ルルさん、砂嵐が現れたので迂回しようとしてたところです」

「え!? きんきゅーじたい!? きんきゅーじたい!」

「まあ……そうですね。緊急事態です」

「わー! きんきゅーじたい!!」

「なんであんなにテンション高いんだろう」

飛び跳ねながらバス内を駆け回るルルを見てサーバルが呟く。

「サーバルですらツツコミをするはやぎっぷりだ。」

「ツチノコー!! ツチノコー!! きんきゅーじたい!」

「緊急事態」の意味をわかって無さそうにルルが眠っているツチノコをたたき起こした。

「なんだようるさいな……」

気持ちよく寝てたところを起こされたツチノコは若干や不機嫌そうにルルに言う。

「というか緊急事態ってなにがだよ」

「それはねー!!」

よくぞ聞いてくれました!と言わんばかりにルルがさらにテンションを上げる。

「砂嵐だつてー! きんきゅーじたい!」

「砂嵐……砂嵐だと?」



ツチノコがルルの言葉を聞いて訝しみながらかばん達の方へ行く。

「おい。砂嵐って大丈夫か？」

「あ、ツチノコ！おはよー！」

「迂回しますんで大丈夫ですよ。車体ちよつと揺れるんで注意して下さいね」

「そうか。なら良かった」

かばんの言葉にツチノコは安心したように一歩下がり、手すりに掴まる。

「じゃあ、迂回するよ」

ラッキービーストが言う。バスが静かに曲がっていく、筈が、タイヤは緩くキュルキュル回るばかりでバスは全く動かない。

「あれ？ラッキーさん・・・？」

かばんがボスウオッチに話しかけるが、ボスウオッチは静かに震えながら

「アワワワ」

「ボスー！またー!？」

サーバルも流石に声を上げる。

「大丈夫じゃない感じか？」

「きんきゅーじたいはまだまだつづくー」

ツチノコがいつまでもはしゃいでるルルをとっ捕まえながら、運転席に向かって声を上げた。

「でもまだ大丈夫です。前もあつたんで」

「じゃ行こっか、かばんちゃん」

かばんとサーバルは運転席から飛び降りてバスの後ろの方へ回つた。

「あ、待ってー！ぼくも行くー！」

ルルもかばん達に続いて飛び出して行った。

「・・・」

ツチノコも無言で先に出て行った三人について行った。

「行きますよ。いっせーのーでっ!!」

そこでツチノコが見たのはバスの後方を思いつきり押す三人だっ

た。

でも、三人の力でもバスはハマった砂から抜け出せなかった。

「うーん、厳しいですね・・・」

かばんが困ったように眉根を寄せる。

そこへツチノコが助言をする。

「スタックは押すより上へ引き上げるようにすると戻るぞ。それとかばん。お前は運転席にいろ。抜け出せた時にすぐ出せるよう準備しておけ」

「あ、なるほど。じゃあぼく運転席に居ますね。サーバルちゃん、ルルさん、バスをよろしくお願いします」

「うん！任せて！」

「かばんちゃんの分も頑張るよ！」

かばんは運転席に戻って行った。そして、

「上へ持ち上げるように・・・せえの！」

とサーバルとルルが力を入れた瞬間、

「うわっ」

サーバル三人の元へそんな声が落ちてきた。

そして

「うっぎゃ!!」

というサーバルの悲鳴も響いた。

だが、サーバルへの急な衝撃と、ルルのパワーでなんとかバスのタイヤは砂から抜け出せた。

「えーつと、どうすつか、これ」

「とりあえず二人ともバスの中に入れとこう！」

そしてツチノコとルルは、サーバルに落ちてきた声の主、(伸びた)スナネコとスナネコの一撃が脳天直撃したサーバルを見ながらそう言った。

「皆さん！バス出ますよ！ってスナネコさん!？」

かばんは運転席から後方を眺めるがそこでスナネコが目に入った。

「かばん！スナネコも詰め込むぞ！」

ツチノコがかばんに叫び、かばんは慌てて前に向き直しハンドルを

握る。そしてツチノコがスナネコを、ルルがサーバルを抱えてバスに飛び乗った。

かばんは全員がバスに乗ったのを確認し、バスを走らせた。

「さて、「難去ったな」

「おーい！起きろー」

ルルがサーバルとスナネコを揺らし、起こす。

「うみや・・・」

「おっ？」

そしてサーバルとスナネコは目を覚ました。

「お、起きたな」

「スナネコ・・・また飛ばされたの？」

「はい。とつてもおつきな砂嵐だったので、夢中になってみていたら飛ばされて、またここに」

「前と全く一緒じゃん！」

「危ないので砂嵐見る時は離れて見て下さいね・・・」

サーバルとかばんが軽く注意するが、スナネコは聞き耳を持たない。

「お、スナノコ。ここにいたんですか」

「ツチノコだ」

そしてスナネコのサラツとしたボケにつかさず口を挟むツチノコ。

「そうでしたか。じゃあツチネコ、ここで何してたんですか」

「だからツチノコだ！なんでカップリングぽく言うんだ」

まだボケてくるスナネコに思わず声を荒げるツチノコ。

「というかボケを被せるな。話が進まん」

言いながらツチノコはスナネコをよく観察する。

（ふむ、天然毒舌な点は変わってるっぽいな・・・あれがスナネコは面白かったのにな。残念だ）

「ツチノコ、なんかいつもと違う」

「へ？」

スナネコの思わぬ一言にツチノコはマヌケな声を上げる。

「あ、スナネコは分かるのー？」

「ええ、いつもならもつともつと奇声をあげる筈なのに今日のツチノコ、やけに冷静です」

「へえ、分かるんだ。すごいねえスナネコ」

「おい、私を奇声キャラにすんな」

スナネコとルルの言葉を聞いて流石にツチノコも抗議を入れる。因みにサーバルは運転に集中してるかばんのどこへさつきと戻って行ってしまった。よっぽどかばんが大事なんだろう。

「ほら今！ツチノコ、私って言いました。普段オレって言うてるのにおかしいです。ボクには分かりますよ？」

「・・・まあ別にバレてもいいんだがな。確かに今の私はお前の知ってるツチノコではないな」

「何言ってるんですか。頭おかしくなったんですか。それとも脳みそ乾燥して砕けました？」

「砕けるか！というかお前の毒舌健在か！」

あんまりな言い草に大声をあげるツチノコ。

「うおう、久しぶりなハイテンションツツコミ」

「お前は何関心してんだよ・・・」

若干や疲れたようにツチノコはルルに言う。

「で、どういう状況なんですか？」

「ああ、それはな、かくかくしかじかだな」

「は？何言ってるんですか。のう・・・」

「何言おうとした!?今度は私の脳に何言おうとした！」

何かを言いかけてハツと口を噤んだスナネコにツチノコは責め立てる。

「なんでもないですよー。脳みそ失くしました？って言おうとしただけですよ」

「なんでもあるわ！というかどうかやったら脳みそ失くすんだ！」

「ヘドバンしてたらポンって飛んでくかもですよ」

「それで飛んだら全国のヘビメタバンド全員脳なしになるわ！というかボケを重ねるなって言ってるんだろ！」

ツチノコは肩で息をしながらつつこむ。

「んで、かくかくしかじか言って言ったら理解するってのが大体の小説のルールだ」

「そんなの初めて聞いたけど・・・というかメタア・・・」

二人の漫才をただ傍観してたルルはツチノコの思わぬ一言に驚きながら言う。

「そんなもんなんですか」

「そんなもんだ」

「でもボクには分からないんで説明してください」

「めんどくせええええ!!」

スナネコの物言いに大絶叫するツチノコであった。

「なるほど」

それから数分、説明途中に色々割り込まれ、その度にツツコミをしてたツチノコはもう疲れ果てていた。

「はあ・・・まんぞくかよ・・・」

「ええまあ」

「そこは言えよ・・・!まんぞく・・・って」

「すごい・・・ツチノコが振り回されっぱなしだ・・・」

「スナネコ・・・ホントすごいよ!」

「ぼくには何があっても真似出来ないですね・・・」

スナネコとツチノコの会話を見て圧倒されたルル、そしてハンドルのボスウィッチを括り付け、運転を完全にラツキービーストに任せたかばんと、かばんに着いてきたサーバルが思い思いの反応をする。

「お前ら変なところで感心してんなよ・・・というかかばんは真似しないでいい」

「あらら、さすがのツチノコもヘトヘトですか」

「ダメだよ。そんなんじや漫才のテツペン目指せないよ?漫才は体力勝負などもあるからね」

「目指してるつもりこれっぽちもないわ」

スナネコに便乗ボケするルルを軽くあしらう。

「ダメだなー。ぼくじやスナネコみたいに熱くならないなー」

「ただでさえ砂漠で暑いのにさらに熱くすんな」

「にしても前世代のツチノコですか・・・」

言いながらスナネコはツチノコに詰め寄り、真正面に見据える。  
「な、なんだよ」

と、ツチノコが言ったと同時に、スナネコはツチノコの両ほっぺを思いつきり引つ張った。

「いででで!!!急に何すんだコノヤロー!!!」

キシャーと威嚇の声をあげながら急いで身を引き、ヒリヒリとする自分の両頬を抑える。

そしてそんなツチノコを驚きの表情でスナネコは見入る。

「今ツチノコ、いつもの様子に戻ってましたよー」

「あ?何が?」

しかし当のツチノコは、全く気付いてない様子だ。

「今ツチノコ、ボク達の知ってるツチノコでした!よね!ルル!」

「う、うん。でもぼくツチノコとあんまり話してないから分からないかも・・・」

「でも今の様子、確かにツチノコさんでしたね・・・」

かばんが話に入ってきた。

「今もわたしたちが知ってるツチノコなのかな」

サーバルも口を挟む。

「んあ?なにが?」

ツチノコは頭いっぱいにくエスチョンマークを浮かべながら四人を見る。

「ツチノコ、自分のことなんて呼ぶ?」

ルルが問いかける。

「あ?私だが?」

「二「うーん・・・」」

四人は揃って唸る。

「もしかして、スナネコさんがツチノコさんに触ると一瞬だけ戻るとかですかね?」

かばんの思いつきが発動する。

「あ、それかも！スナネコ、またツチノコに触ってみて！」  
ルルがワクワクしながらスナネコを揺さぶる。

「な、なんだ？」

そしてツチノコをサーバルとルルが囲み、スナネコがゆっくりと近づく。不気味なオーラを発しながら。

「さて、触らせて貰いますよ・・・」

「検証したいんなら普通にしろよ！」

というツツコミとともにラツキービーストの無機質な声が響いた。

「スナネコの家に着いたよ」

「あ、そっか」

「じゃあ続きはボクの家で、ですね」

「じゃあ行きましょうか」

「わーい！スナネコの家！」

と、あっさりツチノコを解放し四人はさっさと行ってしまった。ハ  
ンドルに巻き付いたボスウオッチを放置して。

「こいつらマイペースすぎるだろ・・・」

アワワワと小さく震えるボスウオッチを回収しながらツチノコ  
咳いた。

## 第十二話 ツチノコとさばく 後編

「ではボクの家に着いたわけですが、早速検証を始めましょうか」  
スナネコの家に入った一堂。バス内でやってたツチノコの検証を改めてやるようだ。

「これまでの検証では、スナネコさんがツチノコさんに触れたら、というかつねったらスイッチしましたね」

かばんが纏める。

「じゃあわたしがツチノコに触ったらどうなるのかな！」

サーバルが元気よく答える。

「じゃあ早速検証してみようか」

ルルがサーバルへツチノコを向かわせ、座らせる。

「よし、触るよー」

「まあいいが、つねるなよ?」

ツチノコが少しビクつきながらサーバルを見据える。そしてサーバルの手がツチノコの頬に触れる。

「:どう?なんかあった?」

「いや、別に:」

「ツチノコ、一人称は?」

「私」

ルルが聞き、ツチノコがキツパリと答えて、一堂は少し落胆する。

「じゃあつねってみたらスイッチするんじゃない?」

ルルのキラールパスにツチノコは思いつきり苦い顔をする。

「つねられるのはもう勘弁なのだが:」

「検証のため仕方ないよ!ほら!サーバル!」

言いながらルルはツチノコを羽交い締めにする。

「おいコラー!やめろ!放せ!!」

ツチノコは抵抗するが、ルルは懸命に抑える。

「ほらサーバル早く!!」

ルルが絶叫し、思わずサーバルはツチノコの頬に手を触れる。そして思いつきり引つ張る。



「いでででで！やめろお前ら!!」

ツチノコは絶叫しながら思いつきり暴れルルを引き剥がし、サーバルの腕を掴み、巴投げをかます。

「うぎゃー!!」

と声を上げながらスナネコの家の端へ飛んでいく。が、何とか壁に受け身を取る。

「ちよつとーいきなり投げないでよー!」

「お前らこそいきなり何すんだよー!」

ツチノコが涙目になりながら抗議する。

「ちよつとちよつと！サーバルちゃんもルルさんも！そうやって検証するのはダメだよー!」

流石にかばんも二人を咎める。

「確かにちよつと強引だったかも。ごめんねツチノコ」

サーバルが耳を垂れ下からせながら申し訳なきように謝る。

「ぼくからもごめんね?」

サーバルに続き、ルルも頭を下げる。

「ま、まあ、分かってくればいいんだよ」

「んで、その様子だと戻ったわけでは無いっぽいですね」

「んあ?まあ、一人称は私だしな」

「となると、つねるっていうのはスイッチ条件ってわけじゃないっぽいですね」

スナネコが冷静に検証結果を元に分析する。

「じゃあぼくとかばんが触ればとりあえずの検証は終了だね」

「つねるのは?」

「それはいらん!!」

ツチノコが一喝する。

「じゃ、ぼくから触るね」

ルルがツチノコに静かに近寄り、頬に軽く触れる。

「どう?なんか変わった?」

「いや、特に何も…。一人称は私だしな」

少し落胆した一同。

「じゃあ次はぼくが触ってみますね」

次はかばんが前に出る。

「じゃあ失礼します」

と言いながらかばんは静かにツチノコの肩に手をおく。

「どうですか？」

「…うおっ!!な、なんだお前ら!!」

ツチノコが素頓狂な声を上げ、みんなから距離をとる。

「あ、戻ってない!？」

「ええ、この様子はいつものツチノコですね」

「ぼくが触るのもスイッチ条件なんですね」

各々が思い思いに言う。が、

「…あ、なんでこんな離れてんだ？」

「あれ戻ったっぽい？」

ルルが反射的につぶやく。秒で戻ってしまった。

「戻ったってことは、私、スイッチしてたのか」

「自覚とかは無いですか？」

「いや一切ない。急に時間が飛んだような感じだ」

ツチノコが自分の体を見渡しながら言う。

「検証を纏めると、ぼくとスナネコさんが触るとスイッチする。そして、そうやってスイッチしてもすぐ戻ってしまう。ということですね」

「なるほどな。結構面白いかもな」

「じゃあ、そろそろ出発するよ」

ラッキービーストがみんなの話が終わったことを見計らって出発の声をかける。

「じゃあ行きましょうか」

と、一同がバスに乗り込む。が、

「今回はボクも着いていきますよ」

スナネコが立ち上がり、バスに乗り込んでくる。

「お、お前も来るのか。これは面白くなりそうだな」

「もつと賑やかになるね！」

ルルも歓喜の声を上げる。

「じゃあ、出発するよ」

かぼんの腕についたラッキービーストが声を上げる。そしてバスは静かにバイパスを通っていく。次の目的地はこはんだ。

## 第十三話 ツチノコとこはん

ラッキービーストが運転するバスがキュルキュルと鈍い音を立てて、こはんへとたどり着いた。

「着いたよ」

「よーし、わたしが一番乗りだ!」

と、サーバルが生き込んでこはんへ降り立つ。と同時に地面に沈む。どうやら着地地点に丁度穴があったようだ。

「うぎやああ!!」

「サーバルちゃん!」

かぼんが慌てて穴をのぞき込み、サーバルを確認する。

「かぼんちゃん!!助けてー!」

穴の中ではサーバルが必死に飛び跳ねている。5 m程の深さで、サーバルのジャンプ力もあまり意味がないようだ。

「サーバルちゃん!捕まって!」

と、かぼんも必死に手を伸ばすが、それでも届きそうにない。

「かぼんちゃん!もつと腕伸ばしてー!!」

「そうしたいけど、これ以上やったらぼくも落ちちゃうから…」

かぼんは悔しそうに手を戻した。

「じゃあぼくの武器に捕まってよ!」

今度はルルが武器を顕現させ、穴の中に差し出した。

「どお?届いた?」

「うん!ジャンプすれば行けるよ!」

サーバルが言った瞬間、ルルの持つ武器に一気に重量が加わった。しかも、それが急すぎた。

「あ」

「うぎやあー!」

ルルは持っていた武器を思わず落としてしまった。当然、それに捕まっていたサーバルも、また穴へ真つ逆さま。

「ちよつとルル!離さないでよ!」

「ご、ごめん!思ったより重くてびっくりしちやった」

「そんな重い重い言わないでー！」

サーバルが少しシヨックを受ける。

「仕方ねえ、これに掴まれ」

そんな様子を黙って見てたツチノコが徐ろに尻尾を穴の中に垂らした。

「ほーう、ツチノコがそんなことをするとは意外ですねえ」

「黙ってる！いいからサーバル。さっさと掴まれ」

「あ、ありがとう。でも届かない」

「うえっ!？」

「ツチノコ、恥ずかしいですね」

「やかましいわ!!」

ツチノコは思いつきり赤面する。

結局その後は、ツチノコが腰を穴に落とし思いっきり尻尾を下ろし、サーバルを捕まらせる。そしてかばん達にツチノコを引っ張りあげてもらい、無事サーバルを救出した。

「はあ…早々酷い目にあつたよ…」

「私も辱めを受けたな…」

ぐったりした様子で並んで歩くサーバルとツチノコ。

「サーバルよ、今度は落ちるなよ…」

横に並んでるサーバルを見ようと首を回したツチノコ。しかしそこにはサーバルの姿はなかった。代わりにあるのは深い穴。

「ごめん。助けてツチノコ」

「今度はぼくも」

その穴から聞こえてくるドジっ子達の声にツチノコはがつくりと項垂れたのだった。

「湖に近くなってきましたね」

そこかしこに空いてる穴に注意しながら歩く一行。湖の辺に建つログハウスが目的地だ。

「にしてもどうしてこんなに穴だらけなんだろうね」

「分からないけど、プレーリーの仕業ってことには間違いないでしょ

うね」

「まあ会った時に聞けばいいだけの話さ」

そして一行はログハウスの玄関に辿り着く。

「じゃ開けるよ」

ルルが扉を開け、みんなで潜入する。プレーリーが掘ったトンネルを潜り、ハシゴを登り居住スペースに入る。

「おーい、ビーバー？プレーリー？」

ルルが問いかけるが返事は返ってこない。

「どうやら留守のようですね」

「仕方ない、帰ってくるまでここで待つか」

と、ツチノコが腰を下ろしたとき、

「あれ？誰がいるんすか？」

声がかかった。

「あ、丁度帰ってきたみたいだね」

サーバルが言いながらハシゴのところに顔を出す。

「ビーバー、プレーリー！久しぶりー！」

「ん？ああ、サーバルさんっすか。久しぶりっす」

「元気にしてたでありますか？」

サーバルの声に優しく返事をするのがアメリカカビーバー。そして元気よく返事をするのがオグロプレーリードッグだ。

二人ともカタカタと音を立てながらハシゴを登ってきた。

「あれ、かばんさんも来てたんすね。それにツチノコさんにルルさん、

スナネコさんまで居たとは…。大所帯っすね」

「おお、スナネコどの！黒セルリアン戦では、助太刀していただき、感謝であります！」

「いえいえ、ボクも得意なことで討伐の助けになれたことは嬉しいです」

スナネコ達が和気あいあいと話す中、ツチノコはビーバーを見ながら深刻な顔をしていた。

「お前が、アメビー…だど？」

「え？なにがっすか？」

「ああ、ツチノコさんの事情はぼくが…」

かばん説明中…

「なるほど、それは面白いっすね」

「一世代前のツチノコどの、でありますか」

二人は不思議そうな顔をしてツチノコを見る。

「それでな、私の時代のアメビーは今のお前とはだいぶ違う外見してたんだよ」

「世代交代で変わるもんなんすね。いい発見っす」

「ところで、そのアメビーというのは、ビーバーどのの愛称でありますか?」

「そうだが、どうした?」

「いや、いい響きだと思っただんで、これからアメビーどのと呼んでみようかと思っただけでありますよ」

「そういうことっすか。もちろん、いいっすよ」

「ありがとうございます!」

「それよりさ、どうしてあんなに穴だらけだったの?」

サーバルが強引に話を振る。

「サーバルったらあの穴に二回も落ちちやってですっすねえ」

「うう、私のドジっ子の部分を強調しないで!それにルルも落ちたから!」

「止めて!恥ずかしいから止めて!」

サーバルが悔しそうにスナネコに突っかかり、ルルが赤くなった顔に手を当てる。

「ああ、あの穴っすか。あれは落とし穴用の穴っすよ」

「落とし穴、ですか」

スナネコが興味深そうに呟く。

「ええ、対セルリアン用のっすけど」

「とりあえず沢山掘って、良さ気な位置の穴を本格的に落とし穴にしようという計画を立てる立てたのでありますよ」

アメビーの説明にプレーリーも付け足す。

「本格的に落とし穴にする前にとしよかんに用があつて行つてたんす

よ。でも、塞がなかったのは危なかったすね。申し訳ないつす」

アメビーが深々と頭を下げる。

「いやいや気にするな。むしろあんな見え見えの穴だったんだから、落ちる方がおかしいんだよ」

「そーやってわたし（ぼく）をいじめるの禁止!!」

サーバルとルルの赤面に一堂は少しほんわかする。

「ところでアメビー。としよかんに何しにいったんですか?」

スナネコが聞く。

「ああ、文字が読めるようになりたいなと思ひまして、文字を読む練習用の本を借りて来たんすよ」

「ほう。文字をか」

ツチノコがほほうと頷く。

「あ、丁度かばんどのも居ることありますし、ここの皆さんで文字の練習をしてみませぬか!」

「おお。面白そうだね!ぼくもやってみたい!」

「じゃあボクも。少し興味があります」

ルル、スナネコも乗り気のようにだ。

「それならば色が色々教えるんで、皆さんで練習しましょう」

「待て。私も文字なら読めるし書けるから私も教える側だ」

「ツチノコが教えてくれるんなら心強いね!」

「じゃあ早速、借りてきた本を読んでみるつすよ」

と、アメビーは本を開いた。



## 第十四話 ツチノコとこはん 後編

「それじゃあーページ目から見ていくっすよ」

アメビーがとしょかんから借りてきた本をみんなで囲む。みんな  
で文字を読む練習だ。アメビーが慎重に本を開く。

「えーっと、これは何て書いてあるの?」

サーバルが隣に居るかばんに聞く。因みに並びはかばんを12時  
の方向とし、そこから時計回りでサーバル、スナネコ、ツチノコ、ル  
ル、プレーリー、アメビーとなっている。

「これは、『サーバルキヤット』って書いてあるよ」

「へえー!私ってこうやって書くんだ!なんかシュツとしててカツコイ  
イね!」

自分の文字という新感覚に感動するサーバル。

「確かに、サーバルさんらしいスタイリッシュな文字っすね」

「でしょー!さっすがわたしだよねー!」

「別にサーバル何もしてないですよね」

「やめてやれ。いつもの事だ」

容赦なくズバツと斬るスナネコを諭すツチノコ。

「このサーバルキヤットという名をもってこの世に生まれたというこ  
とをしたんだよ!」

「あーはいはいじゃあかばん次の文字を」

「ひどい!!」

スナネコの冷めつぷりにショックを受けるサーバル。

「まあまあ、では次…」

言いながらかばんは次のページを開いた。

「えーっとこれは…」

「『そんなに憎いならなんで俺をやらねえんだい。なんで妹に手え出  
した…!なんで妹やらなきやならねんだい!!』って書いてあるな」

「なにそれ」

ルルが変なものを見るような目で文字に目を落とす。

「博士どの達は何をもってこれをアメビーどのに渡したのでありま

しょうか…」

「でも妹がどうか言ってるし、ギンギツネがキタキツネに言ったんじゃない?」

「サーバル…あの二人は別に姉妹じゃないぞ」

「あ、そうだったね」

「姉妹ならやっぱブラックジャガーとジャガーかな?ちようど「俺」って言ってるし」

「でもどうしてブラックジャガーさんがこれを言ってる、それがこの本に書かれてるんでしょうか」

「…」

場が一瞬沈黙に包まれる。

「あーこれはもうアレだ。謎だ。考えるだけムダだ。次だ次」

ツチノコが匙を投げ、次のページを開いた。そのページは見開きを全て使ってデカデカとこう書かれていた。

『『立てい!!!』』

ガタツ

ツチノコのその声でその場の全員がいつせいに立ち上がった。

「あ、違う違うここにそう書いてあっただけだ」

ツチノコが慌てて周りに弁解をする。

「ああ、そうだったんすか。いきなり過ぎてビックリしたつす」

「急にそんな気合い入れちゃってどうしたんですかあ?」

「いや、こんなデカデカと書かれてるの見たらそう発音したくなってな。それと、このマークがある時は力強く発音することになるんだ」

ツチノコが『!!』の部分指しながら説明する。

「にしても『立てい!!!』でありますか。また謎でありますね」

「博士と助手の謎チヨイスはもう気にしないでおきましょ。さあかばん。次のページを」

「あ、はい。捲りますよ」

かばんが次のページを開いた。

「えーっと、これは数を表す文字ですね。『4016円』」

「なんですかその半端な数字」

スナネコが冷めた様子でぶつきらぼうにいう。

「なんでだろう…。ライオンの声で脳内再生されたよ」

「あ、この円つてのはヒトが使ってた硬貨のことだ」

「ああ、ツチノコさんが興奮してたあれですね」

「興奮してたゆうな。じゃあ次行くぞ」

そしてペラリと次のページへ。

「『いやーんばかーん古いよーいーじゃないのレロレロ、ハカセです』  
「…」

その場をまた嫌な沈黙が支配する。

「えーっと、これは何っすかねえ…」

「考えるな考えるな。見なかったことにしとけ」

「これ多分博士が自己紹介かなんかするときにしようとか考えて」  
「おっとそこまでだ次のページだ！」

ツチノコがかばんの考察をぶった切り強引に次のページへ。

「これは、『そうかそうかつまり君はそんな奴だったんだな』ですね」  
「…なんでだろう。かばんちゃんが読んだらすつごく心にグサつてきた」

「ええっ!？」

「奇遇でありますね。わたしでもありますよ…」

「オレっちも…。プレーリーさんに言われたら立ち直れる気がしないっす」

「私もだな…」

「ボクもです」

一気にドーンと落ち込んだ空気になった。

「じゃあさっさと次に行きましょう！」

かばんが空気を変えるため無理矢理次のページへ。するとそこには

『ホワイトもそう思います』

「本からも賛同された!!?!?というかホワイトってだれ!？」

これには思わずかばんも絶叫ツツコミ。

「あー、やっぱりか。ホワイトもこの言葉にや傷つくか」

「ですねー。ワイトもそう思うって思っていましたよ」

「え!? ツチノコさんとスナネコさんはワイトさんを知ってるんですか!?!」

「まあ落ち着けかばん。私もお前に聞きたいことがある」

ツチノコがかばんを落ち着かせながら言う。

「ええ? 聞きたいことですか?」

「ああ。ワイトって誰だ?」

「二」知らないんかい!!」二」

かばんだけでなく、黙って見てたプレーリー、アメビー、サーバルも思わずツツコミ。

「もういいです。疲れたので次!」

かばんが怒ったような素振りを見せながら次のページを開く。

『許してヒヤシンス』

「これぼくに言ってるんですかね」

「なんだろう。すつごくムカつく」

ルルが率直な感想ぶつける。

「アレじゃないっすか? さっきのワイトさんのくだりに対する謝罪じゃないす?」

「だとしてもヒヤシンスはおかしいです」

「独特なセンスだな」

言いながらツチノコがページをめくる。

『許してくんさい』

「ヒヤシンスどこいったんだよ!」

これにはツチノコもシャウト。

「すごい! 独特なセンスって褒めた直後にそれを無くすなんて! この本お笑い知ってるよ!」

「なんで本がお笑い知ってたんだよ!」

「この本色々凄いですね。空気を見て適切な言葉を出すのはすごいであります」

「それ最早付喪神の類だろ…」

「もういいですからさっさと次見ましょ」

スナネコがマイペースにページをめくる。

『フェンス・オブ・うわああああ!!』

「なんですかこれ」

スナネコが大して興味がないようにぶっきらぼうに聞く。

「いや、ぼくも分からないですけど…」

「なんか、必殺技みたいなのを出そうとして阻止されちゃった! って感じだね」

ルルが顎に手を置きながらつぶやく。

「いや、技を出そうとして間に合わなかったって感じっすね」

「むー、それは悲しいでありますな。出せさえすれば何らかのことは起きてたはずでありますから」

「こうはなりたくないね」

「じゃあ次行くぞ」

ツチノコがめくる。

『止まるんじゃねえぞ…』

「止まらないよ!」

「どうしたの!? サーバルちゃん!」

「あ、ごめん! かばんちゃんの声でこの言葉聞いたら反射的に言っちゃった!」

サーバルがかばんに抱きつくように言う。

「よく分からんが、これもまたなんとなく残念な感じが漂うな」

「仲間を命をかけて守った!! って感じもするっすけどね」

「…なんだかぼくもう疲れました」

かばんが疲労に顔を歪ませながら言う。

「奇遇だな。私もだ」

「ボクもです」

「オレっちもっすよ」

「皆さん疲れてるのでありますか!」

「みんな大丈夫!?!」

「体力ないねーみんな」

まだまだ元気そうなプレーリーとサーバルとルルが暑苦しく叫ぶ。

「日も暮れて来ましたし、次もページを見たら一旦休憩するつすよ。一旦じゃなくなるかもつすけど」

「じゃあめくるよー」

サーバルがページをめくる。

『お相手は、コノハ博士とミミちゃん助手、この両名でござんした。バイバイッ!』

「勝手に締めるなー!!!」

結局、かばん達の疲れは余計に貯まることになったとさ。

## 第十五話 ツチノコとへいげん

ツチノコ一行はアメビーとプレーリーの家で一晚を明かし、次の目的地であるへいげんへバスを走らせていた。

因みにアメビーがコノハから借りた本はどこを見ても奇想天外なことしか書かれてなかったもので、ツチノコ達が預かりとしよかんへ返すことになった。

色々問い詰めると約束して。

さて、バスは乗り込んだ一堂を揺らしながら着々とへいげんへと進んでいく。かばんは相変わらず特に意味もなくハンドルを握り、サールはそんなかばんと楽しくおしゃべり。

ツチノコはアンニユイな表情でバスの座席にもたれて、バスの窓から見える景色をボーッと眺めていた。

そんなツチノコにスナネコがくつつき、一緒に窓の景色を眺める。ルルは落ち着きなくあちらこちらへ動き回っていた。

そんな一堂が思い思いの行動で暇を潰していたとき、その事件は起きた。

『止まれ!!』

バスの外からそんな声と共に黒い槍を構えたけものが飛び出してきた。ラッキービーストは思わず急ブレーキをかける。動き回っていたルルは慣性の法則で大きく体制を崩し、バスの中を転がり回った。

その飛び出してきたけもの、見ると黒い鎧に黒い槍、暗い髪色。一言で言えば黒いシロサイのような格好をしている。

「ちよつとー急に止まらないでよー」

バスの地面を滑ったルルが運転席の方へ声を上げる。が、それは全員に流される。

一方、バスを止めた張本人のけものは、バスが止まったことでバス内へ乗り込んでくる。初めてへいげんへ来たときのオーロックスのよう。

「その者共！我が姫を知らぬか!？」

「は？姫？」

乗り込んできたけものが血相を変えて叫ぶが、内容のおかしさにツチノコは間抜けな返事をしてしまう。

「そう！我がシロサイ姫の行方を追っているのだ！お主ら、なにか知らぬか？」

その言葉に運転席から顔だけを覗かしていたサーバルとかばんも、客席の方へ移動する。

「シロサイならへいげんのヘラジカ陣営に居るけど…。というか君は誰？」

「あ、申し訳ない。我が名はクロサイ。シロサイ姫に使える騎士だ」

サーバルに問われそのけもの、クロサイは槍の穂先を上にし、地面に突き立て高らかに名乗る。

「え!?シロサイって姫だったの!?!」

「…まあたしかにそんな感じの雰囲気だけだな」

「シロサイ姫は私にクロサイという名をつけてくれたのだ。私は姫に忠誠を誓うと決めた」

「そうか。世代交代したとはいえ、シロサイへの忠誠心はそのままか。微妙に口調が代わってるけど」

「それより貴殿！先程シロサイ姫はヘラジカ陣営に居ると仰ったな！今すぐ案内せよ！」

クロサイはサーバルの襟首をひん掴みガツクンガツクンと揺らしまくる。

「うみゃー待って!!落ち着いてー!!」

サーバルは目を回しながら必死にクロサイを抑えようとする。そんな声が届いたのか、クロサイはパツとサーバルを放した。

「へいげんはこれからぼく達が行くところなんですよ。そこにシロサイさんも居ますので一緒に行きますか？」

「ふむ、なるほど。ここで会ったのも何かの縁。そなたらに同行させて頂こう。改めてよろしく申し上げます」

言いつつ深々と頭を下げるクロサイ。

「私はサーバル！よろしくね！」



「ぼくはヒトのかぼんです。よろしくお願いします」

「…ツチノコだ。よろしくな」

「ぼくはトムソングゼル・ルル！」

「スナネコです」

クロサイにみんなで自己紹介をする。

「じゃあ、出発するよ」

ラッキービーストの無機質な声が響き、新たにクロサイを乗せたバスは動き始める。

「ふむ、この乗り物は一体何なのだ？見たこともないのだが」

「これはバスっていうんだよ！」

ルルが元氣よく返事する。

「バス…とな。なるほど」

「なあ、私からお前に聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「…聞こう」

「お前はもう既にシロサイとは会っているのか？」

「当然だ」

「じゃあなんで今離ればなれになっているのですか？」

ツチノコの質問を先読みしてスナネコが聞く。

「おい、お前…。ま、私の聞きたいことはそれだ。どうなんだ？」

「…それを話すと長くなるがいいか？」

「じゃあいいです」

スナネコがズバツと切り捨てる。

「あ、いや、道に迷ってはぐれただけだ」

「全然長くねえじゃねえか」

ツチノコが思わずツツコミを入れる。

「んで、恐らくシロサイははぐれて彷徨していたときにヘラジカと出会い、ヘラジカに協力するようになったんだろうな」

「ああ、シロサイ姫…。一刻も早く私にその姿を拝めさせて崇め奉らせて頂きたい…」

バスに両膝をつき、天に拝むように言うクロサイに一堂はシロサイに会わせて大丈夫かと少し不安になる。そこに、

「みんな、ヘラジカ陣営の基地に着いたよ」

ラッキービーストがバスを停めつつ、その声を響かせる。

「お、着いたね!」

「久しぶりに見るなあ」

サーバルとかばんがバスの後ろの手すりに身を乗り出し、ヘラジカ基地の様子を見る。

「あー!かばんとサーバルですう!」

アフリカタテガミヤマアラシのヤマさんがサーバル達の姿を認め、大声をあげる。

「あ、久しぶりですわー!!」

ヤマさんの声にいち早く反応したのはシロサイだ。

「シロサイ姫ええええ!!」

その声に超反応したクロサイがバスの手すりをひとつ飛びし、真っ直ぐにシロサイの元へ駆け寄っていく。

「え!?く、クロサイ!!」

「シロサイ姫えええ!!会いたかったですぞおお!!」

ガチャンとお互いの鎧がぶつかり合う豪快な音を立てながら、クロサイがシロサイに飛びつき抱きしめる。

こうしてクロサイは愛しの姫君に出会うことが出来た。

## 第十六話 ツチノコとへんげん 中編

「姫ええええ!! お久し振り御座いますうう!!」

「く、クロサイ!? な、何故ここに!？」

クロサイに抱き着かれたシロサイは目を丸くしながら訊ねる。

「かばん殿たちに連れてきてもらってなので御座います!」

「え、かばんさま方に?」

シロサイがクロサイがやってきたジャパリバスの方へ目を向ける。

「ど、どうもシロサイさん。ヤマアラシさんも、お久し振りです」

「かばんさま。お久し振りですわ」

「どうもですう。また会えてうれしいです」

シロサイとヤマアラシがそれぞれ挨拶をする。

「なに!? かばんだと!？」

シロサイとヤマアラシの声にヘラジカが真っ先に反応し駆けつける。

「久しぶりじゃないかお前たち!! 元気にしてたか?」

「ええ、まあおかげさまで」

「お前がヘラジカ…ねえ」

ツチノコがヘラジカを見てため息をつく。

「ん? なんだツチノコ。私がなんか変か?」

「お前というか私に変なんだがな。お前らにとって」

「うん? どういうことです?」

「教えてやるよ。アフリカタテガミヤマアラシのヤマさんよ」

「や、ヤマさん?」

混乱しているヤマアラシことヤマさんとヘラジカ軍のみんなにツチノコが身の上の事情を説明する。

「うーん。なるほどね…」

「変な身の上でござるね」

「いななカメレオン」

「それで、その時代の私ってどんなのだったの?」

オオアルマジロが興味深そうに聞いてくる。

「ん？お前か…えーと」

「私も気になるぞ！教えてくれ！」

「わたくしも！」

「拙者も！」

「私もですう！」

「あ、じゃあわたしも…」

へラジカ軍のみんなから質問攻めにあうツチノコ。

「ちよ、ちよい待て。落ち着けお前ら！」

「興味深い話を聞いたねえ」

「ですね。大将」

そこへ新たな声が降りかかってきた。見るとへラジカの陣営からライオン、オーロックス、アラビアオリックス、ニホンツキノワグマがやってきていた。

「面白い話をしてるじゃないか。おれ達も混ぜてもらおうぜ」

「げ、増えたよ…」

「ツチノコ、人気者だね」

「そうだね。羨ましいね」

「らしくないですね」

「お前ら他人事みたいにしやがって…！」

実際他人事だが。

「それで、早く教えてよー！」

「わかったから待てお前ら！一人ずつな！えーっと、まずはオルマーからだ」

「オルマーってだれ？」

「お前だよオオアルマジロ」

「え、そうなの!？」

「私の時代ではそういう愛称だった。そんでセンって呼ばれたオオセンザンコウと組んで何でも屋の『ダブルスファイア』ってのをやってたぜ」

「ダブルスファイア!?かっこいいね!!」

オルマーが過去の自分に心酔してるうちに次へ行くツチノコ。

「次はヘラジカだ。お前は角を武器として使ってるけものたちのグループである『けも勇槍騎士団』のリーダーをしていた」

「ほう、過去の私もリーダーだったのだな！さすが私だ！」

「性格は今とは正反対な控えめだが、それでもみんなから慕われる森の王そのものだったぜ」

「さすが私だ!!」

さらに大声で叫ぶ。

「その煩きは全然違うけどな…。次はシロサイだ。お前はセルリアンの女王事件の時にトワ：あー園長についていき尽力したメンバーの一人だな」

「女王事件…?」

「あー長くなるから省略するが、私の時代に起きた大きな事件だと思ってくれればいい。クロサイとは今と同じように主従関係になつてたぜ」

「私とシロサイ姫の関係は時空を超えるッ！」

「暑苦しいですわ…」

「あーもうその感じがまんま過去の二人だ」

「じゃあ次は拙者を！」

カメレオンが食い気味に聞いてくる。

「おおう、お前か…。お前はそうだな…。忍者っぽくしようと努力してたな。語尾に『ござる』って無理につけたり、一人称を無理に『拙者』にしたりな」

「なるほどでござる。ならば今の拙者は過去からしたら理想の拙者なのでござるな」

「そういうわけさ。次はヤマさんだ」

「はい」

ヤマさんが緊張している様子で佇まいを正す。

「お前は…特にないんだよな。今とあんま変わんねえ」

「え?」

ヤマさんが眉を吊り下げる。

「でもま、あえてゆうなら極度の恥ずかしがり屋で、なにかあるとすぐ

にツンツンさせてた」

「今とあんまかわんないですう!!」

「だから言っただろ? えー、次はハシビロコウか」

「うん。よろしく」

ハシビロコウが控えめに言う。

「お前は特に変わってるんだよな。今みたいな控えめじゃなくて軍人氣質だったぞ」

「え、じゃあ気になってじっと見ちやうって癖は?」

「それもそのままだ。また、鬼のジャパ警ってやつでデカ長つてのもやってた」

「警察…。私が…?というかけいさつって?」

「:セルリアンハンター的なやつさ」

「私がセルリアンハンター!?過去の私こわい:」

ハシビロコウが自分の肩に手を置いて震える。

「さて、次はライオンたちだ」

「うん。じゃわたしからね」

ライオンが待つてましたと言わんばかりに名乗りを上げる。

「お前も変わんねえよ。はい次」

しかしツチノコはぶつきらぼうに言い放つ。

「つてちよつと!少しはなんか言つてよ!」

「うーん、お前はとにかくごろごろしつしめる場所はしめるって感じだ。ほれ、変わらんか?」

「:」

そういわれるとまったく反論できなくなつてしまうライオン。

「はい次、オーロックス。お前も変わらんわ」

だんだんと疲れてきたツチノコはどんどんぞんざいになっていく。

「おいこら!疲れたからつて軽く流すな!」

「お前はただの能筋な筋肉バカだよ。変わつてねえだろ今も」  
「:」

ライオンと同じく黙り込んでしまうオーロックス。

「あ、じゃあ私もそんなにかわらない感じ?」

ツキノワグマが控えめに聞く。

「ああ、お前も変わらん。ほい次、ラビラビ」

ツキノワの言葉をぼつきり切り裂いてラビラビことアラビアオリックスへと行く。

「私はどうなんだ？というかラビラビって私のことか？」

「その通りだ。そんなラビラビはそこにいるルルと一緒に行動してたんだ」

「ルルと？」

ラビラビはそういつつ少し離れたところにいるルルを見やる。

「ぼくとラビラビが？」

「あ、でもそう言われえるとなんか一緒にいたような感覚がする」

「だろうな。なんせお前らは数少ない記憶が失っただけのやつらだからな」

## 第十七話 ツチノコとへいげん 中編その2

「え、私とルルがお前の時代からそのままの個体ってのか!？」  
「その通りだぜ」

ラビラビの言葉を当たり前のように肯定するツチノコ。

「え、じゃあぼく達って他のみんなと比べてなんか特別だったりするの?」

「いやべつに」

「無いんかい!!」

ルルの渾身のツッコミが炸裂する。

「いやいや冗談だよ。ホントは色々あるぜ。例えばな、意識していない内に旧世代の本能に従って行動してたりな」

「え、そんなことあったっけ…?」

「ルルはあつたる。ほら、アクシスジカに塩舐めさせられたとき」

「あー!」

と、かばんが納得したように声を上げるが、当のルルはまだ気づいてない様子。

「あのとき、ツチノコさんが怪訝な顔してたのはこれが要因だったんですね」

「その通りだ。あのときルルが『ラビラビ、ぼくに勇気を』的なこと言ってたのを私は聞き逃さなかったぞ」

ツチノコが得意気に胸を張る。

「ぼく、そんなこと言ってたんだ…。無意識って怖いね。全然知らなかったよ」

「じゃあそのルルに起きたことが私にも起こるかもってことか?」

「ま、そうなるな」

ラビラビの疑問に軽く頷くツチノコ。

「後はそうだな…。感覚的に旧世代のときの力を使えることもあるはずだぞ」

「へえ!それは楽しみだね!ラビラビ!」

「うん。そうだね」



「それよりも、こうして人数が集まったのだ。せつかくだしみんながかばんが提案した球蹴りをしようじゃないか！」

ヘラジカがそんな提案をする。

「お、いいねえ。やろうやろうー！」

ライオンもヘラジカに便乗する。

「球蹴りってサッカーのことか。面白そうだな」

「ボクもやってみたいです」

「ぼくもぼくもー！」

「あ、じゃあぼくも混ぜて貰いますね」

「みんなでやろーよ！」

「ふむ、じゃあ私も参加しようか」

結局、この場にいる全員でサッカーをすることになった。

「じゃあ、チーム分けをしましょう」

「とりあえず私たちヘラジカ軍とライオン達の連合とツチノコ達で分けてみるか！」

そうやって分けてみた結果、

ヘラジカ・ライオン・オーロックス・ラビラビ・ツキノワ・オルマー・

カメレオン・シロサイ・ヤマさん・ハシビロ

かばん・サーバル・ツチノコ・スナネコ・ルル・クロサイ

と分けられた。クロサイは最後までシロサイと別チームになるのを拒んでいたが、自身はヘラジカ軍では無いと説得され、仕方なく受け入れることに。だがしかし、まだ問題はあある。

「でもこれじゃ6対10になっちゃうからそっちが人数的に不利だよ」

「どうしましうかね…」

ライオンとかばんが悩む素振りを見せる。

「簡単な話だろ。そっちから二人借りるだけだ」

しかしツチノコがキツパリと言う。

「あ、そうですね。えーっと、じゃあどなたを勧誘しましょうかね」

「こっちは誰でも構わないぞー！」

「じゃあシロサイ姫だ！」

「ま、そうなると思ってましたわ…」

クロサイはシロサイと同じチームになれて大歓喜の様だ。

「じゃあもう一人はラビラビにするか」

「そうだね！ぼくもラビラビと一緒に居たいもん！」

「奇遇だなルル。私もルルと一緒に戦ってみたいと思つてたところだ」

という訳で最終的な組み合わせは

ライオン・ヘラジカ・オーロックス・ツキノワ・オルマー・カメレオン・ヤマさん・ハシビロ

かぼん・サーバル・ツチノコ・スナネコ・ルル・ラビラビ・クロサイ・シロサイ

となつた。

そして両軍作戦会議に移る。

「サッカーは点取り屋のフォワード、攻撃と守備の橋渡しのミッドフィールダ、守備の要のディフェンダー、最後の砦のゴールキーパーに分かれる。それぞれ誰がどこをやるかだな」

「はいはい！じゃあわたし点取り屋がいい!!」

サーバルが元気よく挙手する。

「よし、じゃあお前はフォワードな」

「やったあ！」

「もう一人のフォワードは誰にします?」

「じゃあぼくもフォワードがいい！」

ルルも続いて手を上げる。が、

「待てルル。お前はラビラビと一緒にミッドフィールダーになつてくれ」

「えー！なんで！ぼくも点取りたいよ！」

「いいかルル。ミッドフィールダーは攻撃へ繋ぐかけ橋となるんだ。だからこそここをお前らに任せたい。お前とラビラビのコンビネーションならカツコよくサーバルにボールを回すことが出来るはずだ！」

「ホント!?!じゃあぼくやるよ！頑張ろうねラビラビ！」

不満げに口を尖らせていたルルだったが、ツチノコの説得で簡単に落ちる。これにはラビラビも微妙な苦笑いをせざるを得ない。

「ツチノコはどこにするんですか？」

スナネコがツチノコに半笑いで聞いてくる。

「なんで笑ってるのか知らんが、私はサーバルと一緒にフォワードに回るつもりだ」

「あ、じゃあボクはミッドフィールダーにしますね」

「なんか不安なんだけど大丈夫かな…」

「だいじょぶです。ぼくに任せて下さい」

スナネコはそういうが、ツチノコの不安な気持ちは拭えない。

「…じゃ、じゃあ次はディフェンダーだ」

「あ、じゃあそこはぼくがやりますね」

かばんが挙手する。

「そうか。じゃあかばんは決定だな。シロサイはどうする？」

「わたくしはゴールキーパーをやりたいですわ」

「ならば私もゴールキーパーだ！」

「ゴールキーパーは一人しか出来ねえよ！」

どこまでもシロサイにくつつつこうとするクロサイに喝を入れるツチノコ。

「う…じゃあ私はかばん殿とディフェンダーを受け持つとする」

「了解だ。じゃあまとめるぞ。フォワードが私とサーバル。ミッドフィールダーがルル・ラビラビ・スナネコ。ディフェンダーがかばん・クロサイ。ゴールキーパーがシロサイだ。これでいいな？」

「異議なし!!」

と、みんなの声が響く。

「じゃあ早速フィールドに入ろうか」

チームかばんがフィールドに入ると、そこには既にライオンたちがもう待っていた。

「作戦会議は終わったようだな。早速はじめようじゃないか」

そしてけものたちのサッカーが始まった。